

## 平成15年度 関西大学博物館実習

博物館学芸員の資格を求める社会人が少しずつ増加してきている。科目等履修生として登録される方は、年齢構成や背景も多様であるが、資格に対する明確な動機が感じられ、履修学生全体に好ましい影響を与えている。博物館における専門職の登用も、次第に多様化してきたようで、博物館関係での進路が広がっていくなら望外である。

しばらく続く不況下において、経済的活動の低下と社会一般にまで広がる心理的不安感、閉塞感は、大学における教育・研究活動に大きな影響を与えつつある。近年の資格取得ブームは、その一端であろう。博物館学芸員取得希望の学生も、年度によって激しく増減する傾向が続いているのは、必ずしも学問・研究の追求のためではなく、現況の社会情勢において「よりよい就職」を留保しようとする意図も含まれた現象でもあるとも考えられよう。この中で、資格に対しての錯誤が生まれないようにしなければならない。博物館学芸員の資格の取得を意図する学生側に、その資格についての十分なガイダンスを徹底し、その有効性や意義、さらには、学芸員に求められる、資格としての必要条件以外の、望ましい資質についての周知を徹底する必要が高まってきている。

平成15年度の関西大学博物館実習は、第1部、第2部への割り振りがうまくいったため、全員の受講を認めた。受講生数は表の通りである。

平成15年度の博物館実習のカリキュラムは、おおむね昨年度と同様であるが、後掲の「平成15年度関西大学博物館実習日程」にあるように実施した。関西大学では金曜日の4時限～5時限、土曜の4時限～5時限、通年・学内での博物館実習を行っている。前期には、「資料の基礎的な取り扱い」から「資料の梱包」、「資料の調書の取り方」へと段階的に実習し、あわせて月に1度程度日曜日を利用した近畿圏の博物館・美術館施設の見学実習を行ない、博物館における学芸業務全般についての基礎的な知識の習得を行うようにしている。後期には、実習生による展示会「関西大学博物館実習展示会」の開催へ向けての具体的な作業について実習する。11月中旬には関西大学博物館の展示室を使って、「博物館実習展示会」を開催する。この「博物館実習展示会」は、習得した学芸業務についての知識と経験、受講生の専門分野や興味を基に、自発的にグループを結成して準備、実施する展示会で、博物館実習の集大成としての行事である。年末には、博物館関連科学についての実習、年明けには実習の反省会を開催して、平成15年度の博物館実習のカリキュラムを終了した。

平成15年度の博物館実習担当者は、博物館・美術館や研究機関、行政機関に所属される学芸員、専門担当者に委嘱し、本学教員とともにあたった。以下に担当者を紹介しておく。

高橋隆博 文学部教授、西本昌弘 文学部教授、米田文孝 文学部教授、黒田一充 文学部助教授、網干善教 関西大学名誉教授、宮武頼夫 前大阪市立自然史博物館館長、勝部明生 龍谷大学教授、佃 一輝 佃一茶庵、明尾圭造 芦屋市立美術博物館、伊藤健司 元興寺文化財研究所、西川卓志 西宮市立郷土資料館、森 隆男 尼崎市教育委員会、井溪 明 堺市教育委員会、一瀬和夫 大阪府教育委員会、文殊省三 大阪歴史博物館、佐々木康人 関西大学非常勤講師、山口卓也 関西大学博物館。

# 平成15年度 博物館実習受講者数

平成15年4月14日現在

全 体				
学部	学科	3年次	4年次	合計
文	英語英文	1		1
	国語国文	4	2	6
	哲	11	5	16
学	フランス語フランス文	2	4	6
	ドイツ語ドイツ文	1	1	2
	史学地理	46	8	54
	中国語中国文	1	2	3
	教 育	1		1
	小 計	67	22	89
	法 学			0
経 済 学			0	
商 学	1	1	2	
社 会 学		3	3	
工 学			0	
第 2 部	4	4	8	
小 計	5	8	13	
合 計	102			
大 学 院	6			
科目等履修生	3			
学芸員コース	2			
総 合 計	113			

全 体							
	3年次	4年次	第2部	大学院	科目等	コース	合計
第1部履修	51	6		1			58
第2部履修	17	20	8	5	3	2	55
合計	68	26	8	6	3	2	113

## 第 1 部 履 修

	3年次	4年次	第2部	大学院	科目等	コース	合計
A	28						28
B	23	6		1			30
合計	51	6	0	1	0	0	58

## 第 2 部 履 修

	3年次	4年次	第2部	大学院	科目等	コース	合計
A	17		8			2	27
B		20		5	3		28
合計	17	20	8	5	3	2	55

# 平成15年度関西大学「博物館実習」日程

授業時間 第1部 金曜日 4・5時限 (14:40～17:50)  
 第2部 土曜日 4・5時限 (14:40～17:50)  
 H.15.4.1

月	第1部 (金曜日)		第2部 (土曜日)	
	日	A	日	A
4	11/金	担当者全員 第1学舎1号館A104教室	5/土	担当者全員 第2学舎C303教室
	18/金	高橋(隆) 第1学舎1号館A104教室	12/土	高橋(隆) 第2学舎C303教室
	25/金	勝部 第1学舎1号館A104教室	19/土	文珠 第2学舎C303教室
	2/金	明尾 第1学舎1号館A104教室	4月26/土	井溪 第2学舎C303教室
	9/金	西本 第1学舎1号館A104教室	10/土	西本 第2学舎C303教室
	11/日	西本・山口・(文珠) 大阪城天守閣・大阪歴史博物館		
5	16/金	黒田 第1学舎1号館A104教室	17/土	黒田 第2学舎C303教室
	23/金	森 博物館実習室	24/土	佐々木 古文書実習室
	30/金	勝部 博物館第2展示室	31/土	井溪 博物館実習室
	6/金	明尾 博物館実習室	7/土	山口 博物館第2展示室
6	13/金	森 博物館実習室	14/土	佐々木 古文書実習室

見学 (時間:10:00～16:00)

月	第1部 (金曜日)		第2部 (土曜日)	
	日	A	日	B
		学 外 実 習 (近郊・希望者のみ)		
6	15/日	明尾・栗生		
	20/金	西川 博物館第2展示室	明尾 博物館実習室	山 口 博物館第2展示室
	27/金	明尾 博物館実習室	森 博物館第2展示室	井 溪 博物館実習室
	4/金	高橋・米田 第1学舎1号館A104教室	夏季休暇中の博物館実習日程表配布・ 実習展班編成等の説明及び東京博物館の解説	井 溪 博物館実習室
7	30/水	米田・山口 元興寺文化財研究所・京都科学		井 溪 博物館実習室
	1/金	西本・米田・山口・栗生		井 溪 博物館実習室
	2/土	見学場所はI部7/4、II部7/5に発表		井 溪 博物館実習室
	11/木 ~ 13/土	高橋・米田・黒田・山口・栗生 見学場所はI部7/4、II部7/5に発表		井 溪 博物館実習室
9	26/金	網干 第1学舎1号館A104教室	網干 第2学舎C303教室	井 溪 博物館実習室
	3/金	佃 第1学舎1号館A104教室	佃 第2学舎C303教室	井 溪 博物館実習室
	10/金	誠之館3号館和室(茶室)	資料取扱い・鑑賞(茶室)	井 溪 博物館実習室
	17/金	西川・黒田 博物館第2展示室	実習展実施計画及び諸作業	井 溪 博物館実習室
10	19/日	黒田・一瀬・栗生 近つ飛鳥博物館・風土記の丘	博 物 館 (時間 10:00~16:00)	井 溪 博物館実習室
	24/金	西川・西本 博物館第2展示室	学生の自主作業・展示指導	井 溪 博物館実習室
11	7/金	西川・米田 博物館第2展示室	学生の自主作業・展示指導	井 溪 博物館実習室

月	第 1 部 ( 金 曜 )		第 2 部 ( 土 曜 )	
	日	A	日	A B
11	10/月 ~ 15/土	担当者全員 (講評) 博物館第2展示室	実習展 (10~14日)・講評 (14日)・撤去 (14~15日)	
	21/金	一瀬 第1学舎1号館A104教室	一瀬 第2学舎C303教室	博物館設立の立案・展示計画等
	28/金	宮武 第1学舎1号館A104教室	宮武 第2学舎C303教室	自然科学資料の整理・保存
	30/日	宮武・米田・山口 大阪市立自然史博物館・大阪市立科学館等	自然科学資取扱い・展示方法等施設見学 (時間 10:00~16:00)	
12	5/金	伊藤 博物館実習室	伊藤 博物館実習室	金属・木器資料の保存処理
	12/金	井溪 第1学舎1号館A104教室	山口 第2学舎C303教室	博物館と情報処理
1	9/金	担当者全員 第1学舎1号館A104教室	担当者全員 第2学舎C303教室	1年間の反省・学芸員の課題
	17/土 締切	1. 提出場所 (提出場所) 博物館事務室	博物館実習簿及びレポートの提出 [レポート論題]「博物館実習1ヶ月年の総括」 A4版横書き4000字(原稿用紙・ワープロ作成等いずれも可)	提出期間 1/10~1/18 提出時間 10:00~16:00 (12:30~13:30は除く)
2	16/月 ~	1. 受取場所 博物館事務室	博物館実習簿及びレポートの返却	受取時間 10:00~16:00 (12:30~13:30は除く)

〔実習上の諸注意〕

(1) 実習に関する全ての連絡は、インフォメーションシステムの「お知らせ」にて行うので、実習のある日の前日には、必ずインフォメーションシステムをチェックする習慣をつけること。

また、休日の実習・見学等の詳細については、その都度授業中に指示をすることもあるので注意すること。

\* [インフォメーションシステムはインターネットでも閲覧できます。URLは <http://inf.im.kansai-u.ac.jp> です。関大のホームページからもリンクしています。]

(2) 見学は時間的に制約される場合が多いので、時間厳守で集合のこと。

(3) 館内においては、館則を守り、学生としての品位と自覚が必要。また、万年筆・ボールペン等を使用しないこと。鉛筆のみ可能。

(4) 実習簿は所定の日に必ず提出すること。採点の参考資料とした後、各自へ返却するので、必ず受け取りに来ること。

以上

# 関西大学博物館実習展示会

日時 2003年11月10日(月)～14日(金) 10時～16時

場所 関西大学博物館第2展示室(簡文館内)

## アソビゴコロ ～村野藤吾と関大校舎～

人間と建築物との触れ合いを目指し、ゆるやかな曲線美で人と建築物をなめらかに繋いだ昭和を代表する建築家・村野藤吾。しかし、彼の幾つかの遊び心は、現代のニーズから徐々に外れつつあります。今だからこそ、私達は原点に戻り、建築と人間の関係を探るべく、今回の展示と校舎見学ツアーを通し、我が関西大学の校舎の大半を手掛けた村野藤吾と関西大学の建築物の軌跡を追います。

## 雛人形

—『雛祭り』と聞いて思い浮かぶものはなんですか？

「3月3日、桃の節句、雛あられ、菱餅、雛人形……」

—その『雛人形』にはどんな種類があるか知っていますか？

「お内裏様、お雛様、五人囃子、三人官女……ええと、他には……」

—何故、雛祭りには雛人形を飾るのですか？

「昔からの習慣でしょ？」

—その『昔』っていつですか？

「え？え？」

—何故そんな習慣が生まれたのですか？雛人形はいつ生まれたのですか？雛人形は全国共通なのですか？

「ええと…ええと……」

今回は、各地に残る雛人形を収集すると共に雛人形の起源を辿り、このような疑問にお答えします。

## もっと美しく。～化粧の変遷～

女性をより美しくする化粧—。

化粧は、はるか古代から行われたと言われ、特に古代では、魔除けなどの呪術的意味を持っていました。その後、大陸からの化粧法を取り入れながら、徐々に日本的な化粧法が「おしゅれ」として確立され、定着していきました。

中でも一番「日本」らしく、かつ特徴的なのが江戸期の化粧法でしょう。浮世絵に見る多くの「美人」画は、現代の化粧法とは掛け離れています。方法が違えば当然道具も違います。彼女たちはどのような道具を使っていたのでしょうか。

そこで今回の実習展では、江戸期を中心に化粧の変遷を紹介します。パネルや文献資料はもちろん、浮世絵や江戸期の化粧道具など貴重な現物資料を展示し、わかりやすく解説しています。この機会に女性も男性も「日本らしい」化粧の世界に触れてみてください。

## 日本画絵具とその作品

絵具は有史以前から絵画に用いられ、昔から多くの種類の絵具があります。

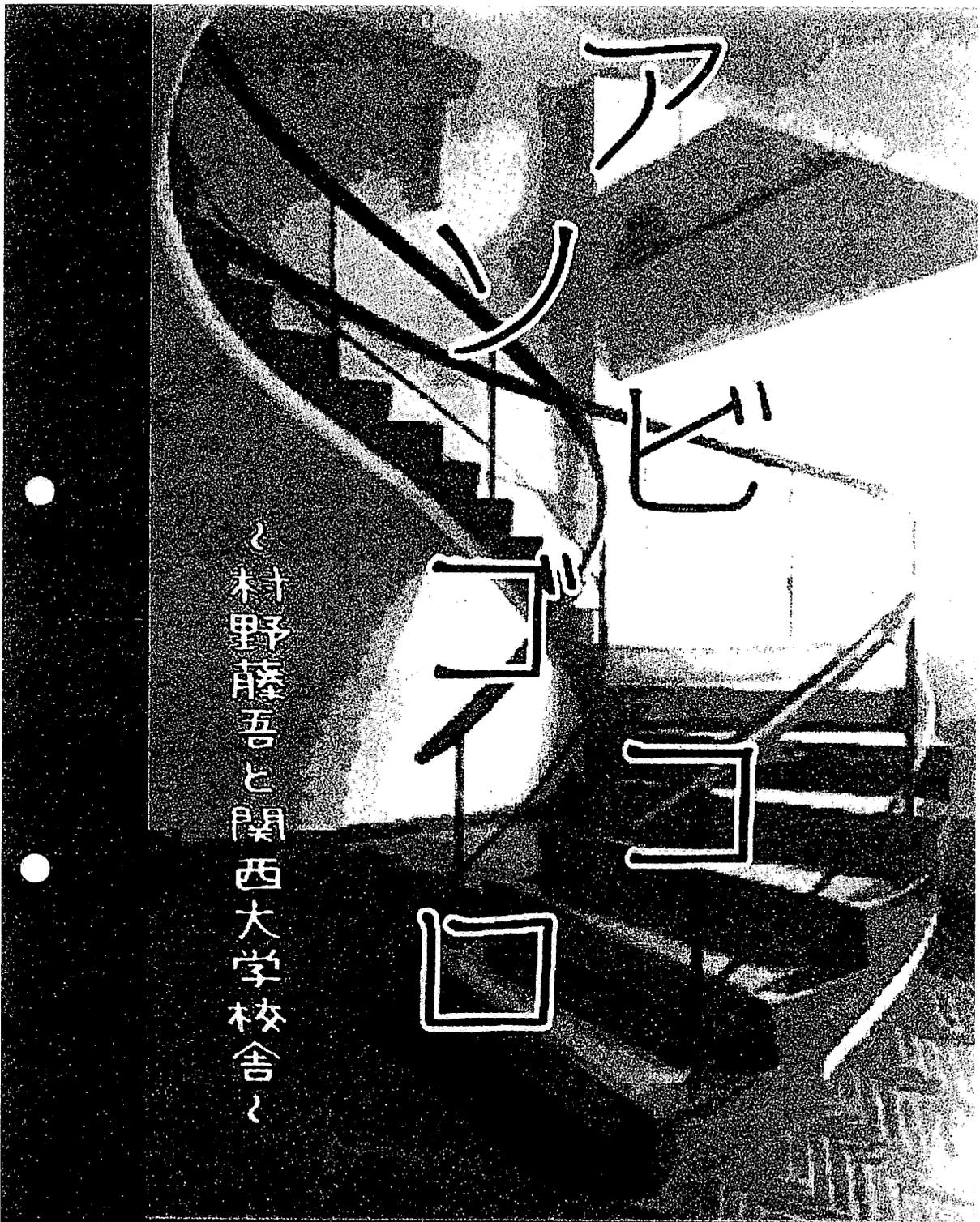
ここでは、様々な種類の絵具の中から、長い歴史のある日本画絵具を中心に展示しています。日本画絵具がどのようにして作られているのかをビデオとパネルを用いて紹介していきます。また実際に、日本画絵具で描かれた絵画も数点展示いたします。

このほか、私たちの手で作った手作りの絵具を展示します。この展示を通して、絵具を身近に感じてもらえたらと思います。

## 伊勢型紙

伊勢型紙とは、江戸時代に流行した「江戸小紋」などの着物の柄の染めに用いる型紙のことです。手漉きの和紙を柿渋で貼り合わせた型地紙に、様々な彫りの技法によって生み出される精緻な文様は優れた型彫師たちによって今日も受け継がれています。しかし、現在着物文化の衰退により、型紙そのものの美術性に着目した新たな展開もみられています。

この展示では伊勢型紙とはどのようなものかを紹介し、本来の「染めの型紙」を生み出す匠の技に光を当てていきたいと思ひます。



く 村野藤吾と関西大学校舎 く

博物館実習展

日時：11月10日(月)～14日(金) 10時～16時

場所：関西大学博物館 第2展示室



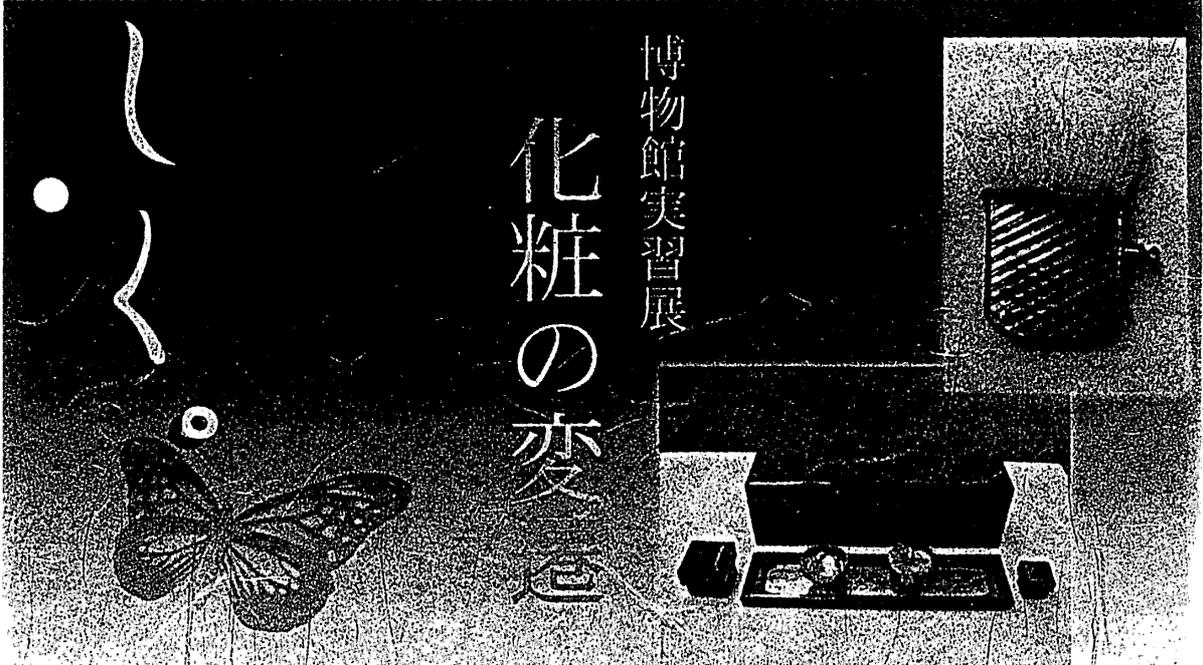
実習展

# 雛人形

11/10 (月) ~ 14 (金)

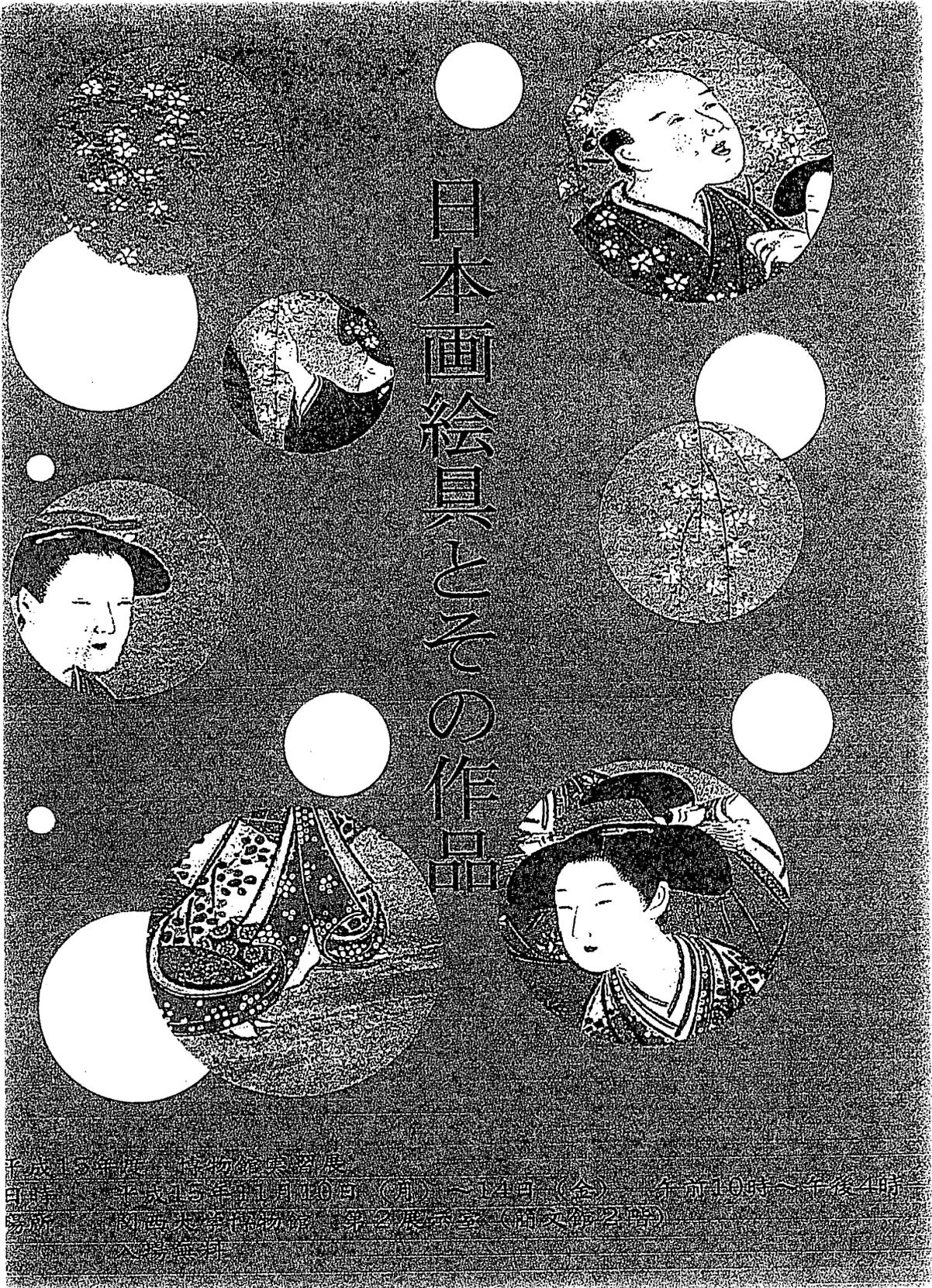
10:00 ~ 16:00

関西大学博物館第二展示室



2003年11月10日(月)~14日(金) 10時~16時  
関西大学博物館第2展示室

日本画絵具とその作品



平成15年度 西宮市立博物館 展覧会  
日時 平成15年11月10日(月)～14日(金) 午前10時～午後4時  
場所 西宮市立博物館 第2展示室(旧文庫2階)

人の手の

博物館実習展

伊勢型紙

平成十五年十一月十日（月）～十四日（金）

関西大学博物館 第二展示室（簡文館二階）

無限の可能性

博物館実習展アンケート 雛人形・村野藤吾班

本日は博物館実習展においでくださり、ありがとうございます。このアンケートは実習最後の反省や参考とするためのものです。ご協力お願いします。

<項目1>性別に関する項目です。該当するものにチェックを入れてください。

男性 女性 その他

<項目2>職業に関する項目です。該当する職業にチェックを入れてください。その他の場合、よろしければ、空白にご記入ください。

保育・幼稚園児 小学・中学生児童 高校生 大学生 社会人  
その他 \_\_\_\_\_

<項目3>それぞれの展示に関する質問です。展示内容、展示方法、図録、ポスター、実習生の解説の様子等に関して、良かった点、良くなかった点、良くなかった点を自由に記入してください。

雛人形班について

村野藤吾班について

<項目4>この実習展が行われるのを、何を通じて知りましたか。

<項目5>雛人形の展示について質問します。

1、雛人形を持っていますか。  
はい いいえ

2、雛人形の変遷は分かりましたか。

よく分かった 少し分かった あまり分からなかった 分からなかった

2-a、2番の質問の答えの理由を、よろしければ、自由に記入してください。

3、この雛人形の展示の中で、どのようなところに一番魅力を感じましたか。

<項目6>村野藤吾建築の展示について質問します。

1、村野藤吾、及び、その建築物、そして、関西大学に関して、関心や興味は高まりましたか。いずれかにチェックを記入してください。

高まった 特に変わりはない 興味が無くなった

2、村野藤吾の建築物のある環境で生活していきたい、してみたいと思えますか。

生活していきたい、してみたい どちらでもいい 生活したくない

3、2の質問に関係した質問です。今、関西大学の建築物の様相は変化を続け、村野藤吾が関西大学の建築物に吹き込んだ息吹は、徐々に小さく、細くなりつつあります。そのようにして、関西大学の建築物、そして、その建築物が作り出す関西大学の様相が変化していくことについて、この展示を通じて、どのように感じましたか。

これでアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。

## 化粧班 アンケート

以下のアンケートにご協力をお願いします。

★1 性別についてお聞かせ下さい ( 男性 ・ 女性 )

★2 職業についてお聞かせ下さい

( 保育園、幼稚園児 ・ 小中学生 ・ 高校生 ・ 大学、大学院生 ・ 会社員 ・ 教職員  
その他: \_\_\_\_\_ )

★3 この企画展を何でお知りになりましたか ( )

★4 化粧の変遷は分かりましたか

( よく分かった ・ 分かった ・ あまり分からなかった ・ 分からなかった )

★5 今回の展示を見て…

<男性>

化粧をしたいと思いますか

( 思った ・ 少し思った ・ あまり思わなかった ・ 思わなかった )

<女性>

昔の化粧をしたいと思いますか

★6 1番興味深かった展示物についてお聞かせ下さい

( )

★7 展示の仕方や流れ、資料の配置具合などについて、良かった点・良くなかった点についてお聞かせ下さい

( )

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。



## 平成 15 年企画実習展アンケート

本日は、関西大学博物館にご来館いただきまことにありがとうございます。今回当館では学生の  
実習授業の一環として《博物館実習展》を開催し、これまで一年間の実習授業の成果を展示会とい  
う形で発表いたしました。つきましては今回の展示会での私たちの反省や、今後履修するであろう  
後輩たちへの参考にさせていただきたく存じます。お手数ではございますが、アンケートにお答え  
いただければ幸いです。またここでは主に「伊勢型紙展示」についてお聞きします。ご面倒かと存  
じますがご協力のほどよろしく願いたします。《伊勢型紙展示研究委員会》

\*該当するところの□をチェックまたは○で囲ってください。

1. 性別年齢をお聞かせ下さい。

男性 女性

10代未満 10代 20代 30代 40代 50代 60代

2. お住まい（簡単で結構です）

( )

3. ご職業

<関大関係者>幼稚園 中・高校生 大学生 ( 学部 ) 院生 校友 教職員

<関大以外の学生>幼稚園 中・高校生 大学生 ( 学部 )

会社員 公務員 主婦 それ以外

4. この実習展をどちらでお知りになりましたか？（複数可）

ラジオ TV 新聞広告 チラシ 学内に掲示のポスター

それ以外の箇所に掲示のポスター 友人知人親族 関大教職員から インターネット

インフォメーションシステム その他 ( )

5. 展示について

伊勢型紙というものをご存知でしたか？

はい  聞いたことはあった  知らなかった

6. 5で「はい」「聞いたことはあった」とお答えになられた方にお聞きします。

今回の展示内容についてますます知識が深まりましたか？

はい  普通  知っていたものばかりであった  わかりにくい

7. 5で「知らなかった」とお答えになられた方にお聞きします。

今回の展示を見て「伊勢型紙」というものについて受けた印象をお書きください。

[ ]

8. 展示について

説明内容：わかりやすい ふつう わかりにくい

展示方法：よい ふつう 悪い

最も印象に残った作品は？ ( )

9. 博物館（水族館、動物園、美術館等）に年に何回くらい行かれますか？

( )

10. 関西大学全体の印象について何かあればお聞かせ下さい。

( )

11. この実習展をご覧になって何か思うことがあればお書きください。

( )

ご協力ありがとうございました。

# 2003年度 関西大学博物館実習展示会 雛人形・村野藤吾班アンケート集計結果報告書

日時 平成15年11月10日(月)～14日(金)

午前10:00～午後4:00

場所 関西大学博物館 第2展示室

## <項目1、2>来館者構成比

男性 9人 (大学生4、院生2、社会人2、非常勤講師1、)

女性 21人 (大学生20、社会人1)

<項目3>それぞれの展示に関する質問です。展示内容、展示方法、図録、ポスター、実習生の解説の様子等に関して、良かった点、良くなかった点を自由に記入してください。

### ○雛人形班について

#### 良い点

- ・実物資料が豊富で良かった。
- ・説明がわかりやすかった。
- ・華やかな展示で良かったと思う。
- ・展示物の配列などはよくできている。モノ自体もいいのを置いてある。
- ・人形に始まる現在までの雛人形の歴史が、人形だけでなく古書からも見てとれ、当時の風習などもわかってよかった。
- ・雛人形の歴史や発展について丁寧に説明されていて良かった。また、展示品の豊富さも良かった。

#### 良くない点

- ・「雛人形の系譜には2通りある」と書いた説明はわかりやすいが、結局雛人形の疑問の数々は聞けずじまいに感じた。
- ・人形の持っている道具などについてももう少し説明がほしかった。
- ・人形の製作がみたかった。
- ・展示品を見ているだけでは時代の変遷がわかりにくかった。
- ・人形の複製は借りられなかったのか？少しちやちく見えた。
- ・個々の説明はあるが、大きな説明がないため何を意図して並べられているのかわかりづらい。
- ・展示のガラスの上の説明が中の展示物とかぶっているのが気になった。
- ・説明パネルで本をそのまま写したのか、今上天皇とそのまま書いていた。年が昭和なので昭和にしてほしい。
- ・キャプションの下の所蔵者名は引用文献の所在ではなく原資料の所蔵者名。

無回答 6

○村野藤吾班について

良い点

- ・写真・模型がよい。
- ・テーマの選び方が良い。斬新。
- ・関西大学の知らない一面について知ることができた。
- ・写真・模型が展示の理解をよく補っていた。
- ・キャンパスツアーのアイデアがよい。
- ・図録・目録がわかりやすくよかった。
- ・過去と現在の対比が興味深かった。
- ・展示のバランスがよい。

良くない点

- ・展示にもう少し工夫が欲しかった。
- ・年表の最初の年が1886年のはずが1986年になっていた。
- ・展示物が少なかった。
- ・説明が多すぎる。
- ・関西大学以外の建築物の資料もあるとよかった。
- ・視覚的工夫・映像を使うなどすれば、もっとよくなったのではないか。

<項目4>この実習店が行われるのを、何を通じて知りましたか。

友人・知人の紹介 17

授業 2

実習生 1

昨年度受講者 2

ポスターを見て 1

先輩の紹介 1

たまたま 2

無回答 4

<項目5>

1、雛人形を持っていますか。

はい 20 (男 3 女 17)

いいえ 9 (男 5 女 4)

無回答 1

2、雛人形の変遷は分かりましたか。

よく分かった 9

少し分かった 16

あまり分からなかった 4

分からなかった 0

無回答 1

2—a、2番の答えの理由

よくわかった

- ・実物が展示されていたため。
- ・いろいろな種類があったから。
- ・説明が分かりやすかった。
- ・実物で刊本などを使ってビジュアル的に訴えるものがあったから。
- ・時代ごとの人形がそれぞれ展示してあったので。
- ・知っていることだったので。

少し分かった

- ・その説明法がとても簡単で理解しやすかったから。
- ・本を読んで分かった
- ・具体的な流れが展示から見えてこなかった
- ・起源をもう少し詳しく知りたかった
- ・雛人形の変遷については文章で表現するだけでなく、図による説明、矢印による表現などビジュアルで説明したほうが良かったように思う。

あまり分からなかった

- ・年代順なのか、地方色なのか？
- ・なんとなく。
- ・ある程度順を追って展示してあったのでいい。
- ・いろいろな雛人形があるのはわかったが変遷という点ではよく分からなかった。

無回答 13

3、この雛人形の展示の中で、どのようなところに一番魅力を感じましたか。

- ・古くからの様々な人形があったこと。
- ・実物展示の多さ。
- ・古い江戸時代の雛人形が見られたところ。
- ・雛人形がかわいかった。
- ・雛人形の歴史・変遷が紹介されている点。
- ・顔の表情の変化。
- ・頭飾りの豪華さ。
- ・ひな壇の細かな説明。
- ・京都と東京の雛人形の違い。
- ・日本人が人形に自らを重ねていた切実さ。情緒の豊かさ。
- ・五人ばやしの由来が能のおはやしであるという説。
- ・あんないい人形がよく借りられたなという驚き。

・あまり感じなかった。

無回答 10

<項目6>村野藤吾建築の展示について質問します。

1、村野藤吾、及び、その建築物、そして、関西大学に関して、感心や興味は高まりましたか。いずれかにチェックを記入してください。

高まった 19

特に変わりはない 7

興味が無くなった 0

2、村野藤吾の建築物のある環境で生活していきたいと、してみたいと思いますか。

生活していきたい、してみたい 12

どちらでもいい 14

生活したくない 1

3、2の質問に関係した質問です。今、関西大学の建築物の様相は変化を続け、村野藤吾が関西大学の建築物に吹き込んだ息吹は、徐々に小さく、細くなりつつあります。そのようにして、関西大学の建築物、そして、その建築物が作り出す関西大学の様相が変化していくことについて、この展示を通じて、どのように感じましたか。

- ・近代建設の保存に対する学生の意識の喚起となるだろう。
- ・良いデザインは外部だけでも残して、内装改装で留めてもらいたい。
- ・最近（建築されている）関西大学の建築物は面白みのない印象がある。
- ・遊び心が失われるのは悲しい。
- ・特徴の際立った部分を残しつつ、実用的建築物としていけばよい。
- ・使い易くなるのなら、改築を歓迎する。
- ・利便性の追求のみに傾くと、ユーモアがなくなって、つまらなくなる。
- ・いくら改装・改築が進んでも、残っていくものもあるだろう。
- ・簡文館の動線が悪いのが気になっていたが、歴史を知ることによって愛着が湧いてきた。しかし、動線の悪さが、建築が消えていく原因になっているかもしれないと感じた。
- ・歴史ある村野藤吾の建築物を簡単に無くしてってしまう関西大学のやり方には共感できない。
- ・展示班が主張を表に出さず、観覧者に判断を委ねている姿勢に好感が持てた。
- ・美術品の価値について反省することの重要性をよく考えるべきだと思った。価値について反省もなしに取り壊すのは良いことではない。
- ・失われていくのは仕方がないが、人の記憶に残したり、このように展示を通して問題を提示することは意味のあることであろう。
- ・伝統を重んじるべきだ。
- ・感謝！

## ○アンケート係 感想

### 雛人形班

・アンケートの結果を見ると、良い点として、実物が多いことや説明がわかりやすいということが多数の入館者の方々によって挙げられていた。これは実習メンバーの努力の賜物であると思われ、非常に嬉しく感じる。悪い点としては、雛人形の変遷や、雛人形に対する疑問についての答えがよくわからなかったということが挙げられていた。原因としては、全体をまとめ、結論までも書いた説明がなかったというような、説明不足が挙げられるのではないかと思う。また他に、展示方法や説明パネルのミスについての指摘もあった。反省点は数多く出てきてしまったが、21人もいるメンバーが協力し合い、実習展という大きなものを成し遂げられたということは良い経験になったと思う。

### 村野藤吾班

・できれば全班共通のものを作りたかったが、二班だけでも充分満足いくものに仕上がったので、結果としてはよかった。回答の内容が予想していたより多岐にわたっていたので、集計上困る点もあったが、無事一連の仕事を完遂できたことを嬉しく思う。

哲01-34 新谷 大二郎

## 博物館実習展 化粧品アンケート集計

- ・実施期間 平成15年11月10日（月）～11月14日（金）
- ・回収枚数 35枚（月9、火9、水3、木3、金11）

### 集計結果

1・男性 10（29％） 女性 25（71％）

2・保育園、幼稚園児	0（0％）	会社員	4（11％）
小、中学生	0（0％）	教職員	1（2％）
高校生	0（0％）	その他	1（2％）
大学、大学院生	30（85％）		

3・友人、知人から	15（42％）	インフォメーション	1（2％）
先生から・授業で	7（20％）	昨年度受講者	2（5％）
家族から	2（5％）	その他（たまたま博物館に来ていて、	
ポスターで	2（5％）	無回答等）	7（20％）

4・よくわかった	10（29％）	あまりわからなかった	5（14％）
わかった	20（57％）	わからなかった	0（0％）

5 <男性／10人>		<女性／25人>	
思った	1（10％）	思った	2（8％）
少し思った	0（0％）	少し思った	5（20％）
あまり思わなかった	4（40％）	あまり思わなかった	10（40％）
思わなかった	5（50％）	思わなかった	8（32％）

6・お歯黒道具	9（26％）	筆、紅皿などの小物	5（14％）
鏡台	7（20％）	全部	1（3％）
明治時代の化粧道具	4（12％）	その他・無回答	6（17％）
江戸瓦版	2（5％）		
安眠香水	1（3％）		

7<良かった点>

- ・展示物の種類が多彩だった。
- ・展示物に大小のアクセントがついていて良かった。
- ・配列がきれいで見やすかった。
- ・江戸瓦版での説明が字もきれいでわかりやすく、面白かった。
- ・パネル説明がわかりやすかった。
- ・担当者の説明が丁寧だった。

<悪かった点>

- ・展示物が多くて少し疲れた。
- ・展示物と説明のパネルが離れていてわかりづらかった。
- ・パネルの大きさが均等でなく、誤字もいくつかあった。
- ・展示物がただ並べてあるだけのような気がした。
- ・順路がややこしかった。

<希望する点>

- ・ガイド説明があればよい。
- ・江戸時代以前の化粧道具についても展示して欲しかった。
- ・日本だけでなく、海外の化粧道具も見たかった。

# 2003年度 博物館実習展 「日本画絵画とその作品」

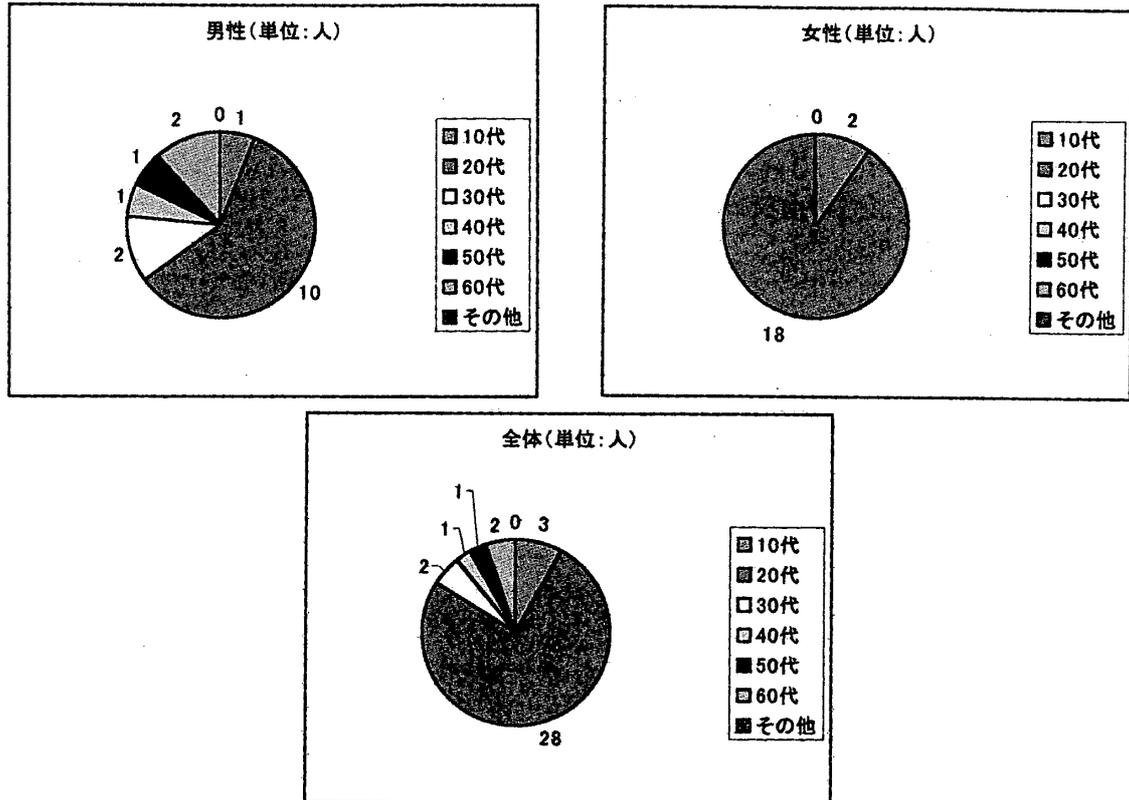
## アンケート集計結果

有効回答数 37

### ①性別

男性 17人      女性 20人

### ②年齢別

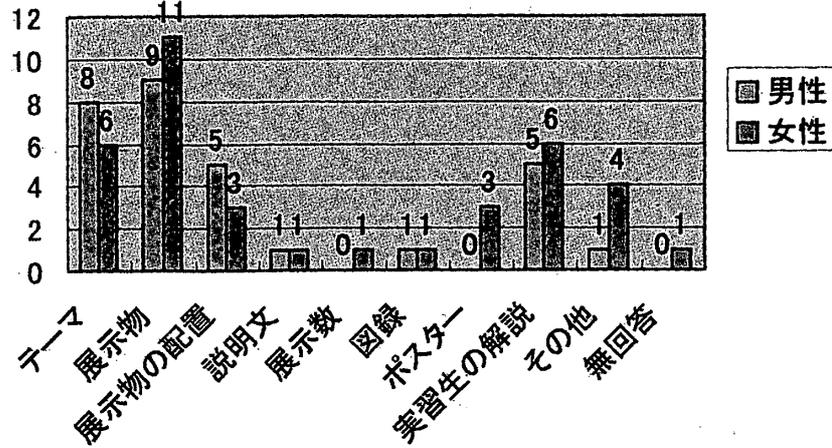


### ③今回の実習展は何で知ったか

友人・知人から	19人
今年度受講者	4人
前年度受講者	3人
無回答	2人
先輩から	2人
後輩から	1人
先生から	1人
ポスターで	1人
HPを見て	1人
実習スケジュールを見て	1人
子どもが実習に参加した	1人
たまたま博物館に来た	1人

④

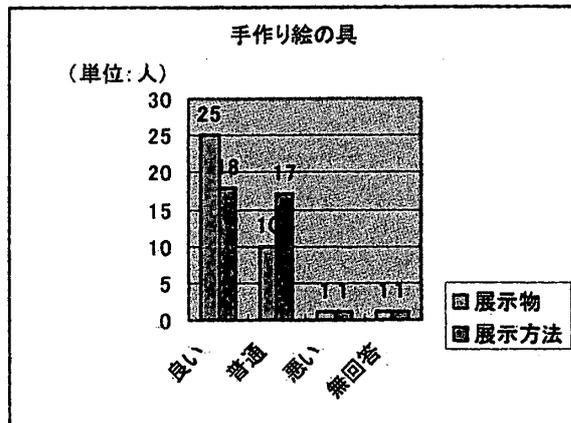
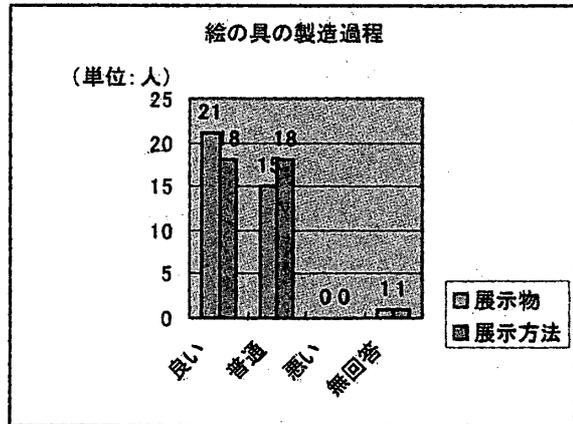
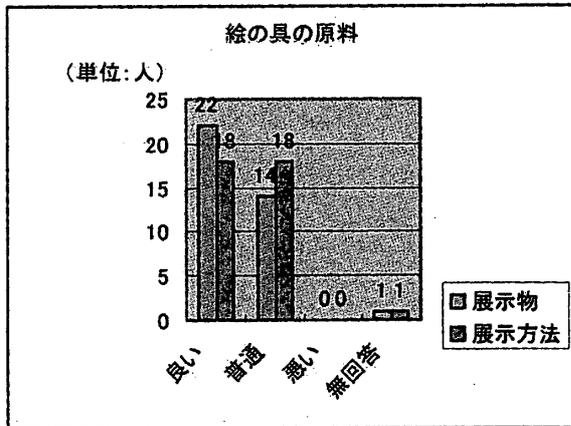
「日本絵の具とその作品」の展示について良かった点  
(単位:人)



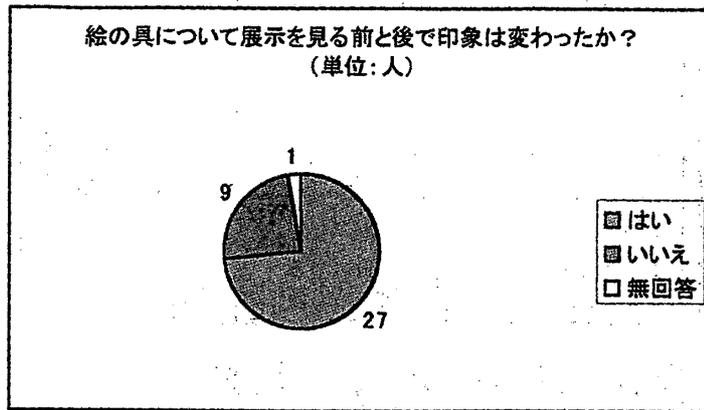
良かった点：その他のコメント

- ・ 日本画に見る絵画
- ・ ビデオ
- ・ 手作り絵の具を実際に作ったこと
- ・ 絵

⑤個別展示について



## ⑥絵の具についての印象の変化



## ⑦絵の具について印象が変わったと答えた人の全コメント

- ・ 絵の具はもっと化学っぽいものかと思っていた。(20代・男性)
- ・ 「これ」と言われればちょっと困るけれど、知識が増えた分変わったと思う。(20代・男性)
- ・ 顔料について知っていなかった。(60代・男性)
- ・ いろいろな種類の絵の具について知ろうと思った。(20代・男性)
- ・ 絵の具にもいろいろあるんだなあ。(20代・男性)
- ・ 専門的な知識を学生がよく理解していた。(50代・男性)
- ・ 絵の具の特色がそれぞれ細かくあったので、さまざまな特徴を持っていると知れてよかった。(10代・男性)
- ・ もっと鉱物を使っていると思っていたが、意外と身近なものを材料にしているのだなあ。(20代・男性)
- ・ これからは過程・原料を考えるかも……。 (20代・男性)
- ・ 絵の具を作る工程など気にしていなかったが、ビデオなどを使って具体的に説明されていたので。(30代・男性)
- ・ その製作過程は思った以上に複雑なことであると思った。(30代・男性)
- ・ 顔料に加えるものによってさまざまな種類や用途に応じた絵の具が作れるという仕組みが分かった点。(20代・男性)
- ・ 絵の具が何で出来ているかを知って、より興味を持った。自分でも作ってみたいと思った。(20代・女性)
- ・ 絵の具は大変労力をかけられていることを知った。あと、絵の具が手作りで出来ると知って驚いた。(20代・女性)
- ・ 手作り絵の具が作れるんだと思った。(20代・女性)
- ・ 自作で出来るものとは思わなかった。(20代・女性)
- ・ 以前は絵の具というと「売っている」というイメージが強かったが、自分で作れるという発想に驚いた。(20代・女性)

- ・ 自分で作れるものだとは知らなかった。(20代・女性)
- ・ 手間がかかっているなあ……と。(20代・女性)
- ・ 手作り絵の具の発色に驚いた。(20代・女性)
- ・ 卵で作った絵の具は新鮮でした。(20代・女性)
- ・ 複雑で奥が深いと思いました。(20代・女性)
- ・ いろいろな過程を経て作られていることを知った。(20代・女性)

#### ⑧「日本絵の具とその作品」の中で最も印象に残ったもの

手作り絵の具 (10)

ビデオ (6)

絵の具の製造過程 (3)

稲荷狐図 (3)

絵の具の顔料 (2)

大学の所蔵品 (2)

源氏物語の絵 (1)

大津絵 (1)

中村貞以の絵 (1)

蛭狩図 (1)

昔の絵の展示 (1)

印象に残ったものなし (8)

#### ⑨意見・感想・疑問点全コメント

- ・ ご苦労様です。(20代・男性)
- ・ 「手作り絵の具」で、同じ絵を展示した方が比べやすいと思う。(20代・男性)
- ・ 説明文のパネルがあまり美しくない。(わざとあのような作りにしたのかもしれないが。) それ以外は良かった。(20代・男性)
- ・ 学生の展示としては工夫と努力が見られる。(60代・男性)
- ・ 絵の具の退色の差異が展示されているととっても良かったです。(10代・男性)
- ・ それぞれのブースの入り口に人の心をキャッチする、興味を引かせる代表的なものを1つ置いてみては?と思われた。(20代・男性)
- ・ 実習生から具体的な展示解説が欲しかった。(30代・男性)
- ・ 図録の内容は良かったです、字が細か過ぎて見にくい。(20代・男性)
- ・ ビデオと解説がとても良かったです。ありがとう。(20代・女性)
- ・ 既製絵の具と手作り絵の具の違いをもっとわかりやすくして欲しかった。(20代・女性)
- ・ 日本画に見る絵の具の展示について、説明が不十分。この説明だと、ただ絵を展示して

いるだけに見える。(20代・女性)

- ・ 既製と自作絵の絵画、同じ絵を2枚飾る方が違いはわかりやすかったと思う。(20代・女性)
- ・ 大変興味深いテーマで楽しかったです。(20代・女性)
- ・ もう少し絵の解説をして欲しかったです。(20代・女性)
- ・ 見やすく、理解を深めやすかった。良かったです。歴史的な流れはつかみ辛かった。(20代・女性)
- ・ 大津絵欲しいです。下の千手観音が！！(20代・女性)
- ・ 順路が少しわかりにくかったです。あと、日本画の展示について、キャプションがもっと欲しいと思いました。(20代・女性)
- ・ 手作り絵の具は普通の絵の具より重みがあるような気がしました。(20代・女性)
- ・ 面白かったです。(20代・女性)
- ・ 既製品の絵の具、手作り絵の具で書いた絵を統一した方が違いというか手作り絵の具を活かせるのではと思いました。(20代・女性)
- ・ それ相応の絵の具があるのですね。絵の具の製造過程は知らなかったから面白かったです。(20代・女性)
- ・ とても見学していてわかりやすく、良かった。(20代・女性)

以上

「絵の具について、展示を見る前と後で印象は変わったか？」という質問に、約3/4も  
の人が「はい」と答えていた。その中でも、「絵の具が自分で作れるものとは思わなかった」  
という意見が多かったことから、「絵の具は既製品」というイメージがすでに定着している  
ものと思われる。また、『日本絵の具とその作品』の中で最も印象に残ったものは何か？  
という質問でも、1番多かった回答が「手作り絵の具」だった。今回、当該展示会を開い  
たことによって、米館者の方々に絵の具がより身近なものとして感じてもらえたことが何  
よりの成果であったと思う。反省すべき点は、説明文のパネルの字が小さくて読みにくか  
ったり、解説不足だったりなどの指摘があったことから、少々自己満足的な展示になっ  
ていたように思われる。見る側の視点に立って考えることが重要であり、今後の課題である  
と感じた。

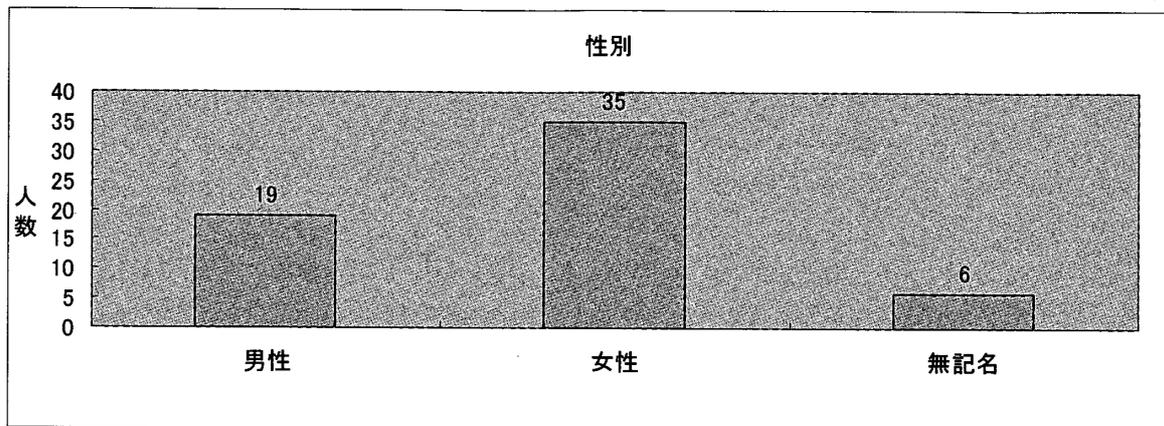
# 2003年度 博物館実習展 伊勢型紙班アンケート結果についてのレポート

- ・アンケート結果について
- ・日毎の来館者数と天候
- ・アンケート結果に対する総括

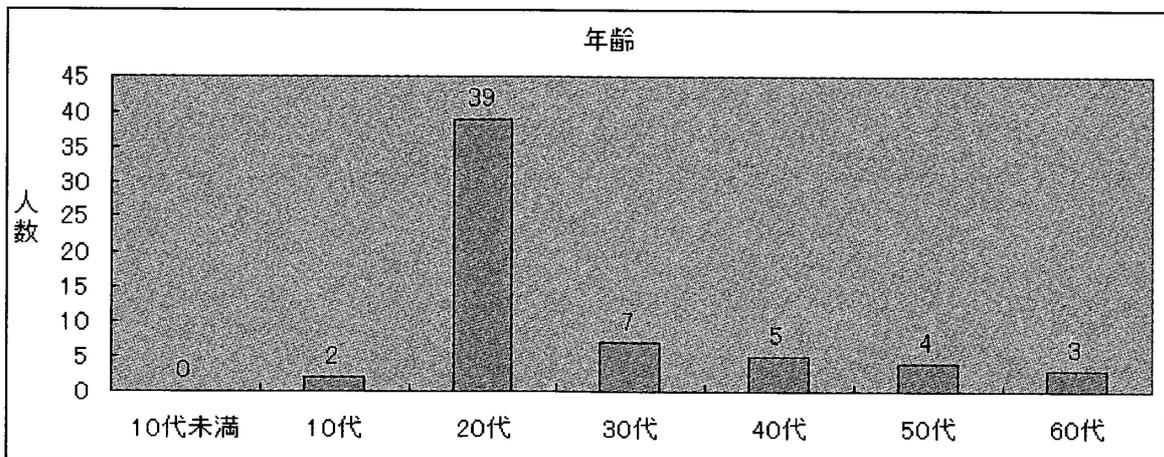
博物館実習展アンケート結果（伊勢型紙班）開催期間平成15年11月10日～14日

## 1. 性別年齢について

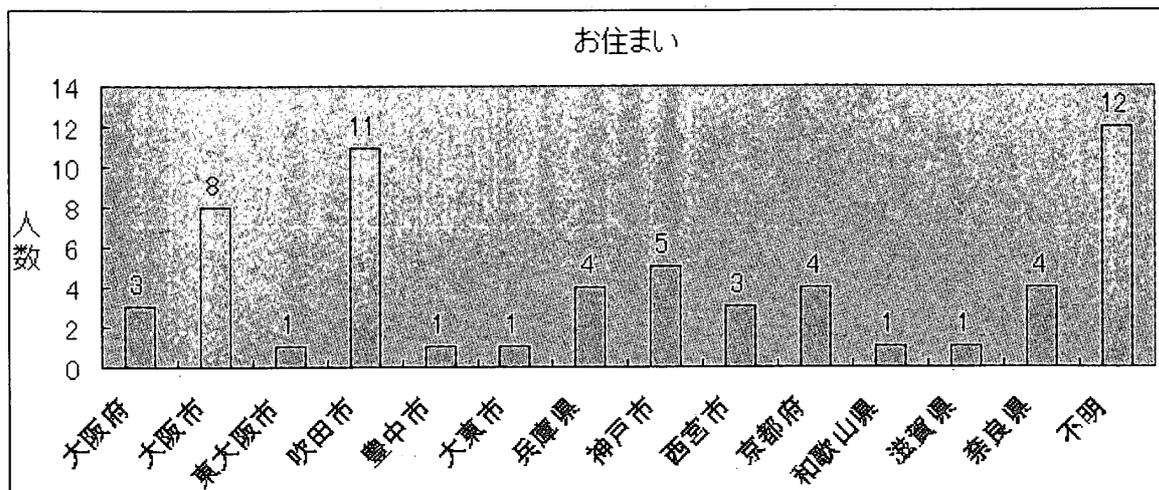
○性別



○年齢

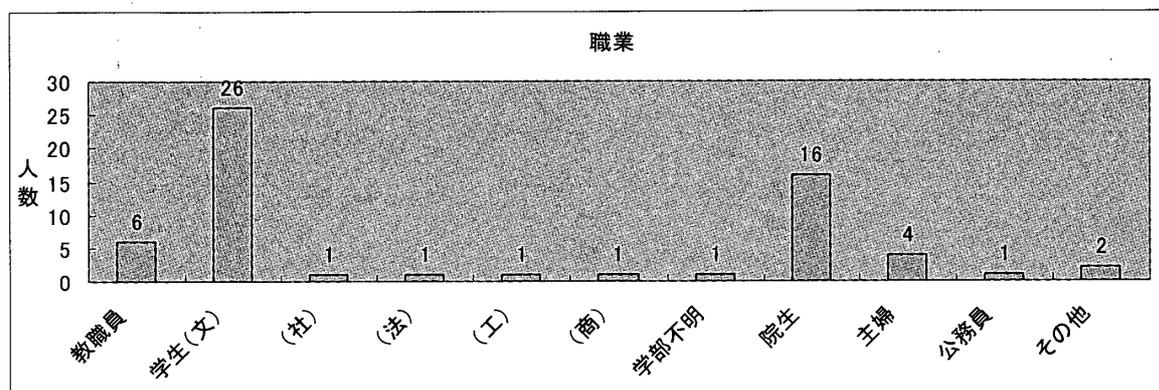


## 2. 住所について



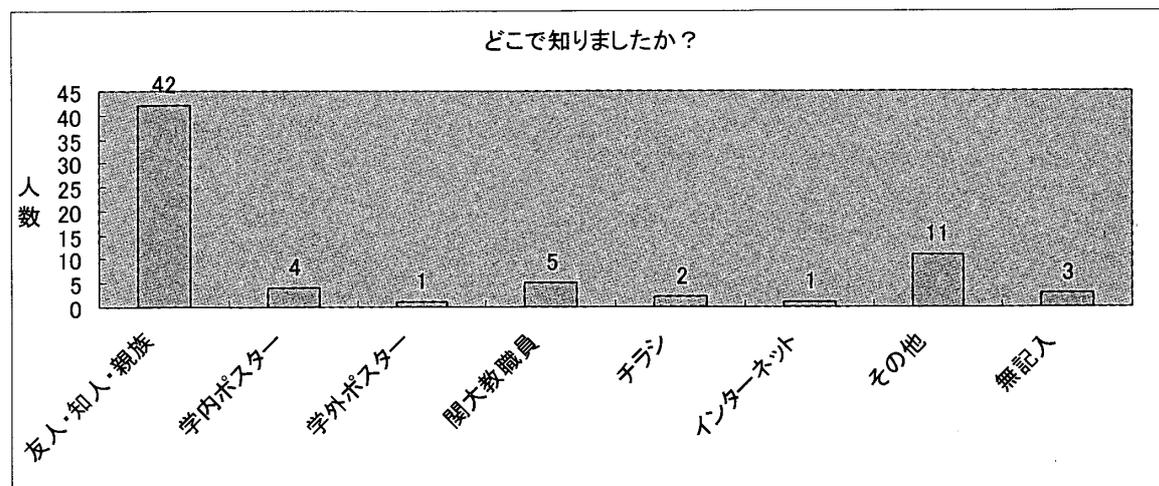
## 3. 来館者の職業

※ (関大関係者と外部で分けてみたが外部は主婦と公務員のみ。学生等は全て関大関係者)

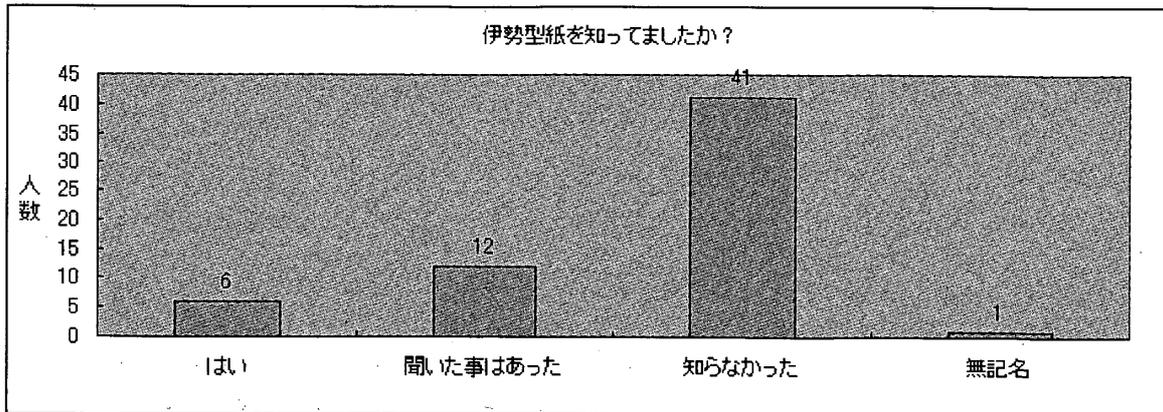


## 4. この実習展をどのようにして知ったか。(複数可)

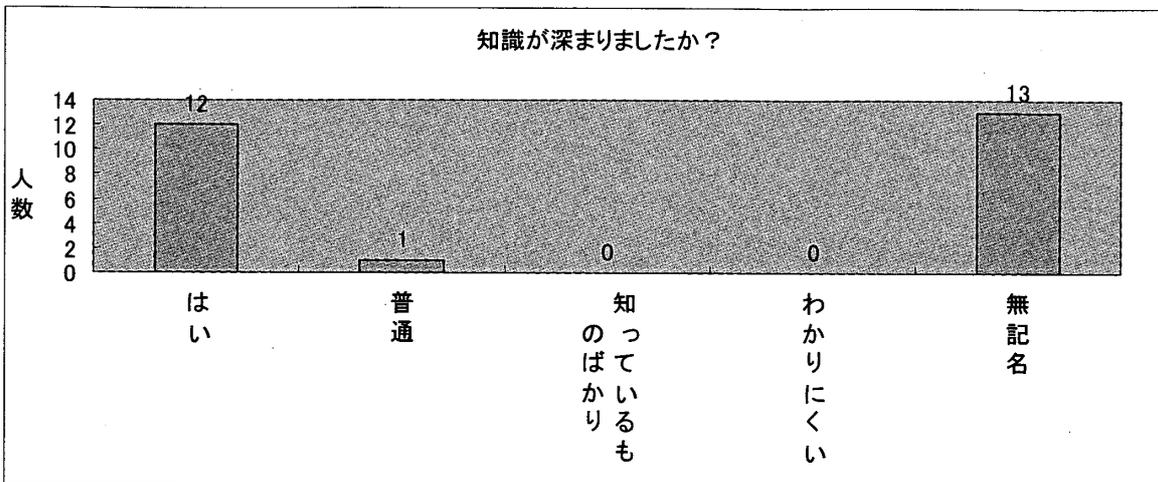
※ (ラジオ、TV、新聞広告、インフォメーションシステムの項目もあったが回答者ゼロ。)



## 5. 伊勢型紙について知っていたのか



## 6. 5で知っていた方は果たしてこの展示により知識が深まったのか



## 7. 5. で「知らなかった」と答えた人の伊勢型紙というものについて受けた印象

- ・ 技術度高い伝統工芸。
- ・ 細かくてすごい。室町時代くらいからあったことに驚き。
- ・ 魅力感じ興味わいた。
- ・ 繊細で美しい。感心した。
- ・ デザイン性高いこと。印伝はなじみ深い柄である案外身近にあるもの。
- ・ 華美ではない。どっちかというとな質素な小紋の柄を作り出す職人技はすばらしいと感じ、私自身小紋は好きな柄ですが、その柄を作り出す大変さを知り、なお愛着を感じた。
- ・ 非常に細かい芸術で感心した。
- ・ 模様造るためだけでもいろんな人の手がかかっていると思った。
- ・ 大変細やかで難しそう。
- ・ とても細かい作業で模様がすばらしいと思った。
- ・ 実物は見ているがなかなか優れもの。
- ・ 細かくてきれいで職人技だなと感動。
- ・ 細かさに驚いた。職人技だ。
- ・ 着物生産の裏にあれだけ地道な作業があるとは知らなかった。本当に感動した。
- ・ 痛みに耐えてよくがんばった。感動した！
- ・ 江戸小紋の型紙になることを教えていただいてこうした型紙の流通というものを知りました。

- ・物によっては見ているだけで酔いそうになった・・・。
- ・ほかにどのくらい型紙の種類があるのでしょうか？
- ・型紙というものがどのようなものかはわかった。

## 8. 展示について

### 説明内容

わかりやすい：41人 普通：15人 わかりにくい：2人 無記入：2人

### 展示方法

よい：30人 普通：19人 悪い：5人 無記入：6人

### 印象に残った作品

- ・職人尺絵
- ・型紙の実物
- ・職人の屏風
- ・しおり
- ・印伝
- ・彫刻技法について
- ・武士の柄と庶民の柄
- ・着物
- ・庶民の柄
- ・道具彫り
- ・コースター
- ・つるの紋様の型紙。かわいかった。
- ・型紙の一つ一つが楽しめた。
- ・美術型紙
- ・なすび
- ・化粧の変遷
- ・とんぼの模様がかわいかった
- ・全部
- ・細かすぎ
- ・看板がステキ。
- ・

## 9. 来館者が博物館各種に年にどのくらい行くのか

・0～1回：9人 ・2～3回：19人 ・4～10：18人 それ以上：5人 無記入、不明：9人

## 10. 関大についての印象

- ・ケチ
- ・大きい
- ・大変よいところ
- ・緑が多く環境に恵まれた所。
- ・広い
- ・デカイ
- ・楽しい
- ・開放的でのびのびしたところ
- ・明るい
- ・雰囲気いい所
- ・もう少し勉強する学生が増えてほしい。人のことは言えんが・・・。

- ・ 汚い
- ・ いい所
- ・ デカすぎ
- ・ 文学部校舎ボロすぎ。
- ・ 緑の多い大学ですね。

## 1 1. この実習展を見ての感想

- ・ 去年よりすっきりしていた。
- ・ 全体を象徴する目玉作品と導線をしっかりしてほしい。
- ・ 去年のほうがよかった。
- ・ 面白かった。型紙の現物展示を見て細かかったこと。
- ・ 光が少ない気がする。初めて見たが感心した。
- ・ 「ごあいさつ」のキャプションが読みにくい。工夫しているのはよいが別に白でもよかったのではないかな。
- ・ 照明も工夫すべし。
- ・ こじんまりしている。
- ・ みんながんばっていた。
- ・ とてもわかりやすい展示。見やすかった。
- ・ 本格的ですごい。
- ・ おもしろかった。
- ・ 学生の人がこんな展示しているなんてすごい。
- ・ 毎年同じく一班あたりの予算が少ないため、十分な展示ができていない気がする。
- ・ 説明がこなれていてわかりやすい文章であった。展示物の伊勢型紙に興味深く見れた。
- ・ 限られたスペースでの展示だが、その中でうまくまとめられていると感じた。
- ・ もう少し展示のところに説明があればよかった。どうやって作るかをみせてほしかった。
- ・ 色んなテーマで展示していておもしろかった。
- ・ 去年展示したが去年より見やすかった。
- ・ 頑張ってください。
- ・ おもしろい。
- ・ さまざまな展示が見れ面白かったです。
- ・ コースターやキーホルダーなどの身近なものにも型紙が用いられていることを知り、より親しみを感じた。
- ・ すごく面白かった。ひとつのテーマを見るのもいいけど、こういうふうテーマがいくつもあっても楽しいですね。
- ・ 実習生がかなりがんばっている。
- ・ 展示説明も詳しくしていただいて、展示品の理解をいっそう深められました。
- ・ 展示のコンセプトがはっきり示されており、どのように「みせる」のかをしっかりと考えた（意識した）展示であると思いました。展示の起承転結というか、流れをきっちり作っていたところがほかの班に比べて優れていて、わかりやすい展示になっていました。班の皆さんが協力してきちんと取り組んだ成果だと思います。展示とともに図録も資料やインタビューに基づいて作成されており、非常に勉強になりました。しかし、学習意識の高い人を見ると興味深い展示であるといえますが、一般の人々をひきつける展示という展では「目玉作品」がないため、少し寂しいと感じるかもしれません。注目度の高い展示品の有無が、展示のレベルを決めるとは決していませんが……。とにかく皆さんが楽しんで取り組んでおられる様子をいつも見ていてうらやましかったです。お疲れ様でした。
- ・ なぜこのような展示にしようと思ったのか。(マイナーすぎるので) ごあいさつを拝見しましたが、「見えないもの」をコンセプトにしたためとありましたが、よくわかりませんでした。ごあいさつの看板も見にくいです。パンフもつらつら知識だけを見せたいという印象を受け、製作にどのくらいの時間を要するかといった基本的な事項が全くなく残念。
- ・ 2年前の実習展で苦労したことを思い出しました。ちなみに私も当時アンケート係でした。12月末に集計した覚えがあります。最後までがんばって！

来館者人数・当日の天候

日時：天候・来館者数

11月10日（月）：曇り・10人

11日（火）：大雨・16人

12日（水）：曇り・17人

13日（木）：曇り時々晴れ・7人

14日（金）：晴れ・10人

## アンケート結果の総括

設問1～4については主としてアンケートにご協力いただける方にアンケートに対してスムーズに入っていた  
べく為の導入措置として作成した。

設問3、4では、果たして関大以外からの来館者がどの程度おられるのかを知り、その方々はいったいどのよ  
うな情報ツールを利用することで来館されたのかを知りたかった。どのような方々が来館されるかを知ることがで  
きれば、今後の後輩実習生の参考となりえるし、また私たちの今後の社会で活躍するに際、イベント等を開催する  
時、マスメディア戦略をいかにして練ればよいのかというものを考えていけるかと考えこのような質問を設定した。

関大生以外の方、特にまだ大学生でない方や子供がいいらっしゃるご家庭の方が多数来館されることを期待し、こ  
の実習展をご覧になられて私たち関大学生にどのような印象を持ったのか、ひいては関大全体に対し様々な印象を  
持つ方がこの実習展を機に好印象をお持ちになられ、関大で学びたいという熱い意欲を持ち、私たちの後輩として  
博物館実習のみならず全ての分野で活躍する人材を輩出できるのであれば私たちにとっても誇りであるし、この実  
習展がきっかけだというならばこれ以上嬉しいことはない。果たしてどのような方々が来館されたのかを知りたか  
った為に関大関係者と外の枠を設けた。

残念なことに1、3、4の結果からわかるようにはほとんどが履修生の友人知人を占め、関大関係者以外は数人  
にとどまった（履修生の多くは女性。来館者も女性が目立つ為）。その数人の方が何らかの印象を受け、意義ある時  
間を過ごせたことを祈るのみです。

設問5についての結果は伊勢型紙が一般的にマイナーな題材であったためか、「知らなかった」と答えた方が  
大多数でありました。ただ「聞いたことがあった」、「知っていた」という方も意外に多かったのではないかとと思わ  
れます。

設問6については無記名者が多いのはどのように受け止めるべきか。特に何も印象がなかったと考えるべきで  
あろうか。

設問7～11についてですが、前述したようにこの展示をご覧になられた方が展示メンバーで力を入れた伊勢  
型紙について何かを得ていただけたならば私たちもやった甲斐があるというものであるし、せつかく時間を割いて  
来ていただいたからには有意義な時間となってほしい、との願いがこめてあります。

設問7は「感心」「感動」といった形容詞が目立ち、全体的に好印象であったようです。その中で「魅力感じ興味わい  
た」「ほかにもどのくらい型紙の種類があるのでしょうか?」といった回答はまさに今後も学ぶ機会があるなら学んでい  
かれるのではないかと期待させられる意見であり、私たちの展示実習の向上を図るための授業だけではなく来館者をも教化  
させる授業にできたのではないかとという意味では嬉しい意見であります。ただ、「物によっては見ているだけで酔いそ  
うになった・・・」との意見があるように導線や展示方法については再考の必要も感じさせるが、あのスペースではあれ  
が限界であったと思われる。今後別な機会で今回とは違った大掛かりなスペースを利用するイベント等に立ち会うとき  
の参考にとどめておきます。

設問8の展示方法についての解答を見ると大体の来館者が満足していただけたと感じることができます。常駐さ

れた方々のご足労によってこのアンケートを手渡しで配布していただくというやり方も、来館者が気さくに常駐員に話しかけることができ展示についての質問を容易に行えたのではないかと思います。常駐員の方々に感謝する次第です。来館者が印象に残った作品も様々あるようです。

設問9は博物館等どの程度興味ある方が来館されているのかを知りたかったのですが、あまり参考にならなかったかもしれません。(違う班の実習生にもアンケートを配布している可能性もあるため。)

設問10も前述したように関大に対するどのようなイメージをお持ちになられている方々がいるかを知り、その方々が果たして何か共鳴するところがあればと思ったのですがあまり参考にならなかったようです。

設問11については様々なすばらしい意見を頂戴しました。特にマイナスイメージに思われる感想をお書きになられた方々に対しては感謝の念で一杯です。本来感想等を問われると、あまり悪いイメージは書かないでおこうとなりがちであると思います。しかしあえて改善点をやんわりと、もしくは厳しくご指摘していただくことにより改善点が見えてくると思います。このようなことは、今回の実習展だけでなく私たちのこれからの社会にも生きていくものだと思うのであります。

また私たちが受けた意見は今後の後輩実習生たちにも参考になると感じます。一生懸命物事に没頭するあまり時にはバランス感覚を欠く場合があります(少なくとも私は)。その様な場合に客観的に物事を見る方の意見、反対論というものは得てして正論となりうる場合もあるということを学んだ気がします。

来館者の日毎の人数では木曜日に大きく落ち込んだ以外は安定していたようです。火曜日は朝からずっと雨が降りしきっていたにもかかわらず来館された方も多くありがたい気持ちでいっぱいです。

以上のように拙い文章ではありますが今回の「伊勢型紙実習展」における私たちアンケート班のアンケート結果を受けての感想であります。

最後になりましたが、このアンケートを面倒であるにもかかわらず配布していただいた常駐員の方々に感謝を評するためにここに報告させていただきます。

見知らぬ来館者に渡すというものがどれだけ勇気が必要であるかは存じているつもりですがそれ以上にストレスを感じていらっしゃった常駐の方もいたと思います。そのような方々にご協力いただきましたことを非常に感謝します。同時にリーダーであった北田さんにはアンケート作成等に際して多大なご迷惑をかけたことを深くお詫びし、支えていただいたことに対する感謝を述べることによりこの感想を締めくくらせていただきます。

以上

アンケート文言作成・アンケート集計者：吉川博行、石川勇樹、申庭華  
グラフ作成：石川  
報告書作成・総括：吉川

# 平成15年度 博物館実習報告 — 受講生のレポートから —

一年間の実習総括

## 博物館実習1ヶ年の総括

史地01～34 小野木 ルリコ

この一年間、博物館実習を受講して本当によかったと思っている。それは、博物館を取り巻く状況を知れただけでなく、博物館の資料の取り扱い、保存、展示方法、集客のポイント等、博物館を見る視点が大いに広がったことに起因していると思う。

私は将来、学芸員もしくは歴史(考古学)関係の専門職に就きたいと希望しており、博物館実習には最大の熱意を持って取り組んだ。大学に入ってから幾度となく博物館・美術館・遺跡には足を運んで来たが、博物館実習を受講した前と後では明らかに視点が異なっていることを実感した。見学者でも関係者でもない、客観的な立場から博物館の展示を見ることができるようになった。具体的に、実習を通して私がどのような観点で博物館の展示を見るようになったかを述べたい。そして、それと併せて私が博物館を作るのなら、という前提に立って、理想の博物館について述べたいと思う。

まず、博物館の立地である。これは前から気になっていたことである。博物館は人に来てもらい、資料を見てもらわないと意味は無い。そのためにはマンション広告のように「〇〇駅から徒歩3分」などとする必要はないが、ある程度の交通の便は考える必要があるだろう。しかし、その博物館が何をテーマにしているかで立地は異なってくる。近つ飛鳥博物館のように、周辺の一須賀古墳群を取り込み、自然公園の中という立地を前面に押し出している博物館にとってはどうしようもない問題である。安土城、小田原城、伊勢神宮などのように、歴史的建造物がそのまま資料であり、その建造物に付属して博物館・資料館を建設した場合はやむを得ないだろう。その場合はその立地、その場所までの交通や道路まで全てが資料であり、歴史的価値を持つだろう。博物館の立地・交通を考える時は交通機関や所要時間のみを見るのではなく、博物館が何をテーマにしているのか・博物館の売りは何なのか、まで見る必要がある。

次に博物館の中に入ったら空調を考える。展示ケースの中は温度・湿度は管理されているが、外気に全く影響されない訳ではない。大きな彫刻、仏像などは展示ケースに入れず、そのまま展示している場合もある。以前、京都国立博物館での特別展「空海と高野山」では高野山所蔵の仏像がケースに入れることはせず、展示されていた。この場合、ライトの当て方や置く位置によって環境は変わってくるが、基本的には見学者が置かれているのと同じ環境下にあると言ってよい。資料の種類によって最適環境は異なるが、基本的には温度20℃、湿度60%を保つのがよいだろう。先述した、京都国立博物館のような場合は多数の来館者が予想されるため、温度と湿度は少々低めに設定しておくのがよいだろう。

実際に展示品を見るときには、展示方法そのもの、照明などに気を配る。大概の博物館・美術館は展示品保護のために照明を落としている。視力の悪い人や高齢者には辛いだろう

が、展示品保護を考えたらやむを得ない。しかし、博物館の中全てを暗くしてしまうつもりは無い。展示スペースはもちろん暗くするが、その他の所、特に休憩室やロビーなどは見学者がくつろげるよう、光をたっぷり取り入れて明るくすることが望ましい。展示品によって展示方法は変わってくるが、私が専門とする考古遺物の場合、複製、復元展示がどうしても多くなってくる。復元展示は視覚的に訴えやすいのだが、真実を伝えているのかという疑問が残る。

最近では端末機器を用いて情報検索をしたり、映像を見せたりすることが一般化している。万人に向けてパネル展示するには難のある専門情報も知ることができる上、写真や動画で資料を見せることができるため、未整理の出土遺物や展示に堪えられない資料も見ることができる。情報端末は有効に使用すれば個人の興味に沿ってさらに学習を深めていける。しかし、その点で問題になるのがメンテナンスである。近つ飛鳥博物館ではフローリングの床を用いているため、埃が立ち難く絨毯を引いている博物館に比べ、メンテナンスの手間がかからない。しかし、フローリングは資料を取り扱う際に非常に気を遣う必要がある、見学者の足音が響くため、端末からの音声等がかき消されてしまう虞がある。フローリングと絨毯の間を取って、ビニール張りの床やリノリウムにするのも手である。

展示図録はできる限りよいものを作りたい。最近では、写真撮影技術、印刷技術の進歩によってかなり綺麗なカラー図録を作ることができる。しかし、カラー印刷だとやはりコストがかかってしまう。最近多いのが、目玉の展示品や最初の何ページかをカラー写真にし、その他は白黒で印刷するというものである。それでコストを抑えて低価格にし、より多くの人に購入してもらおうとしている。それも一つの手である。京都国立博物館の高野山展、大阪市立美術館のクールベ展、聖徳太子展、奈良国立博物館のインド・パキスタン展のように目玉があり、大勢の集客が見込めるものは3000円前後の値段を付けても購入者が大勢いるが、少し小さな博物館になるとそうはいかない。特に、歴史系の見学者層がある程度限定されているようなものは図録の売上を考えなくてはならない。橿原考古学研究所附属博物館の平成14年度秋季特別展の図録は700円という値段であった。橿原考古学研究所附属博物館でこの値段をつけていることに、いかに図録の売上が厳しいものかを思った。図録の値段・質は展示品によって左右されると考えた方がよいだろう。

その他の施設だが、資料室・図書室は必要だと考える。博物館には社会的役割・教育的役割・文化的役割の三つがあると考えられる。地域の学びの場として活用すること、生涯学習の場として活用すること、子供たちの啓蒙の場として機能すること、などが社会的・教育的役割である。これからの時代、博物館が生き残っていくためには学校に代わる学びの場として機能していかななくてはならない。そのためにも資料室・図書室の充実を図り、博物館の得意分野を生かした図書を置くのがよいだろう。

以上の点を踏まえて、私が理想とする博物館の構想について述べたいと思う。

前提条件として、考古資料を主に扱う博物館、場所は大阪府の某所ということにしたい。

博物館は私鉄の駅から徒歩で約20分。バスを使えば停留所三つ分である。ここは古くから緑釉陶器や瓦器が見つかっており、古代～中世の遺跡の可能性が考えられていた。また、

付近には寺址が存在し、複合遺跡であろうとの見方が強かった。発掘調査で平城～平安時代の木簡が出土し、寺院址からは多数の瓦と伴に心礎痕が見つかった。寺址や遺跡出土の木簡により、ここが古代の官衙址だということが判明し、考古学・古代史の分野に大きな反響を呼んだ。この遺跡址に博物館を作ることになった。

まず、博物館全体は古代の官衙遺跡をイメージしたい。門を入ると宮で言う朝堂が広がり、その奥に役人のいる建物がある。建物は5階建て。入口を入ると広いロビーがあり、その奥に受け付けがある。ロビーはガラス張りで1～2階の吹き抜けにする。ロビーのイメージは大阪歴史博物館である。大阪歴史博物館は受付が一階で展示スペースとは少々離れている。博物館に入ったら1,2階の吹き抜けのような感じにし、自然光を取り入れ、解放感を演出したい。入ってきた見学者に少しでも心地良いと感じてもらいたい。国立民族学博物館の、受付を抜けて2階に上がる階段のイメージも良い。見学者以外の一般の人にも開放し、発掘調査で出土した遺物をガラスケースに入れて展示したり、大阪府内の遺跡地図などを置いたりする。他の博物館の特別展ポスターや市民講座、研究会のお知らせなどを張り、情報交換の場としたい。展示室は2階と3階。1階奥は講義室や図書室。図書室は一般者が無料で利用できるよう、ロビーに直結させる。図書の貸し出しができればよいのだが、管理に大変な手間と労力がかかるため、行わない。博物館で扱う図書は基本的に歴史関係のもので、普通の書籍とは異なる。発掘調査報告書や図録、論文集など紛失したら取り返しのつかないものも多々存在するためである。博物館の総敷地面積は約2万平方メートル、建物の面積はその半分、学芸員の数も5～10人である。

展示室で取り扱う資料の時代は、遺跡に則して飛鳥～奈良時代である。しかし、奈良時代以降も何らかの遺跡が存在した可能性があるため、出土品を検討しながらそれ以降の時代も展示に加えたい。展示資料はどうしても考古遺物が中心になってしまう。できる限り実物を並べたいが、木簡は無理だろう。官衙遺跡ということを考えると、木簡は展示の目玉になるだろうが、木簡の処理は大変難しい。最近では木簡中の水分を凍結乾燥させる方法や、水分をショ糖に置き換える方法が取られているが、考古遺物の保存処理は日々進歩しており、10年前の保存方法は既に使えないと言われるほどである。現在の方法がいつまで用いられるかは全くもって分からないのである。そのため、実物を展示する訳にはいかない。複製、もしくは写真を展示し、実物は保存処理を施して保管しておく。保存処理は元興寺文化財研究所か奈良文化財研究所に委託したいと思う。展示室内部は当初、掘立柱建物をイメージして柱を目立たせようかと思ったが、柱が邪魔になって展示方法が限られてしまうため、柱のイメージは外すことにした。博物館の設計に関しての講義が起きたと思う。建物の回廊を巡る感じで、入口入ってぐるっと一周して出口から出てくるようにしたい。当然、入口と出口は同じような位置に来ることになる。床はリノリウムにしたい。病院の床を思ってもらえればよいだろう。特別展示室は2階の1室に設けたい。

図録だが、常設展図録と特別展図録を作る。常設展図録はどうしても考古学系になってしまう。その分、古代の分野ではどこにも負けないものにしたい。“古代史を学ぶのであれ

ばここの図録は押さえておきたい”そんな風に言われるようなものにしたい。さらに、学芸員の研究紀要も毎年作成したい。社会的・教育的機関としての役割も大切だが、研究機関としても役割も重視したい。

以上が1年間、博物館実習を受講した結果至った私の理想とする博物館構想である。

現在、学芸員になることは大変困難で、博物館を取り巻く状況も複雑である。しかし将来、博物館に携わることができたら博物館実習での授業を参考にしながら、自分の理想に向かってよりよいものを作っていきたいと思う。

## 1、博物館見学の感想

### ・ 最近の傾向と問題

一年間、数多くの博物館を見学し、実習したが、最近の博物館は二極化しているといえる。先ずひとつは、従来のように展示ケースに展示物を入れ、解説札を添えるといったかたちである。これは、ほとんどの常設展でみられ、来館者に対して消極的であり、『見に来たい人だけが来ればいい』もしくは『価値を分かる人だけが分かればいい』といった受動的な側面をも持つ。具体的な博物館を挙げるとすると、地方の歴史博物館や公立の博物館である。これは、広く一般の人に捉えられている博物館像でもある。一方、もうひとつは、最近巨額の建築費、内装費、管理費を費やしてできた体験型博物館である。これは、どちらかという、海外の影響を受けているのかもしれない。直接、手で触れてみたり、肌で感じてみたりと自分の実体験を通して展示物を見るといったかたちである。特別展などの新しい企画でみられる傾向でもある。来館者に対して積極的であり、博物館へ来館する理由も限定される。

では、このふたつの博物館の問題点は何であろうか。前者はまず経済的効果はそれほど見込めない。来館者の数もこれから伸びていくとの期待はできない。展示物に、どれだけ多くの人に関心をよせ、足を立ち止まらせているだろうか。これは、来館者の教養の低さや無知を問題としているのではなく、あまりにもその価値を見出す材料が少なすぎると思う。例えば、土器を展示ケースに入れ何も書かずに展示していて、どれぐらいの人が足を止めその価値を感じるだろうか。また、似たような土器を数十点並べてみたところで、来館者の関心は高まっていくだろうか。現代人は、分かりやすさを求めている。海外の文明展や、有名な画家の展覧会に多くの人が集まるのは、ひとえにその「分かりやすさ」があるからである。分かりやすいということは、とっつきやすい。自分で考察することも可能になるし、感動も生まれやすくなる。何をするものかも、その価値も定かではないものからそれを生み出すほど一般の人は博学ではない。後者のほうは、一時的な経済効果は生むだろうが、それ以上の管理費、人件費がかかるために決して経営が安定しているとも思えない。こちらの問題点はいろんなことを限定してしまうことだ。前述にもあるが、博物館へ来館する理由を限定してしまう。体験を通して来館者はアミューズメント性を求めて、博物館としての機能や働きを超えて、何も学ぶことはしなくなってしまう。来館者にとってそこは博物館ですらなくなっているのかもしれない。さらに簡単にレプリカや模型になり、自分でも触れることの出来てしまう展示物に来館者は、価値を感じるだろうか。そこからの、創造の世界はかなり限定されたもの、もしくは誰かに想定されたものになってしまう危険性を孕んでいる。

### ・ 改善点

では次にその問題点をどのように改善していくかを述べたい。両方に共通して言えることは、来館者を野放しにするでもなく、また縛りつけもしないという柔軟さを持つことである。従来型の博物館においては、来館者の興味を引っ張ることが必要である。来館者の『な

ぜ?』を引き出すことである。それには展示物を通して何らかのアピールをもっと強めるべきだと思う。これは、一步間違えると、来館者に対してかなり押し付けがましいものになってしまうかもしれない。しかしどんな展示にもそれを見せる側の意図というものが存在するという事を自らの実習展で感じた。実際、課外実習の時に付き添ってくださる先生方が展示物に関して何気なく説明して下さったことが、自分にとっては、とても印象深いものになった。一方、自らが学芸員側にある実習展中に来館者に説明したくてうずうずするようなときもあった。もちろん、展示したパネルからそれがカバーされていれば、何の問題もないのであろう。しかし来館者はあまり文章などを読まないし積極的にテーマを持って展示物を見ているわけでもない。すると、どんなすばらしいものを見やすく展示しても来館者の感じ得るものは少なくなってしまう。従来型の展示は、『どんな展示をするか』ではなく『どんなことをテーマとするか』をもっと追求することが必要だと感じた。そして最近多くできている体験型博物館に対しては前述したとおり体験というものだけが一人歩きすることを注意すべきだと思う。それには、体験することから学ぶことへの移行をしなければならない。博物館がアミューズメントパークではなく博物館であるという理由からだ。具体的にどうしたらいいかという、こちらも『何でもいいから触れるものを触ってもらおう』とか『体験すればよい』という接し方では、本末転倒である。本当に体験を通して何かを伝えたいなら、各博物館によってそれは変わってくると思う。それには、ときに問題を投げかけ、来館者に考えてもらうことも必要ではないか。

## 2、博物館実習の感想

### ・ 授業内容

履修中、かなり博物館に行った。もちろん課外実習で出かけたのが多いが、個人的にも7、8箇所見に行った。すると知らず知らずのうちに、この博物館はここに力を入れているな、こんな工夫をしているなどこれまでと違った視点で見えるようになっていた。更に、学芸員に前より積極的に質問できるようになった。それは、毎回の授業で多くの先生方に出会って、みんな色々なアプローチから何らかの展示物に対して思いを込めているのだなと思ったからである。しかし、諸先生方の一部から感じたのは、その展示物に対して思い入れが強すぎて、(研究者としてはとてもすばらしい研究につながるのかもしれないが)人間の歴史的遺物であるものが、共有の財産ではなく、一部の学者のものであるかのように感じた。そしてどちらの場合でもそれを扱うことは、とてもデリケートな作業で難しいと感じた。毎回の授業は実践するときは二コマで十分であったが、講義で二コマはかなり長いと感じたので、一コマ講義で一コマ実践が望ましいと思う。多くの優秀な先生方に来ていただくのは非常に光栄なことであったが、微々たる弊害もあった。それは、実習内容の重複である。今年度ならば、調書のとり方などが何回か重複していた。もちろん復習という意味では何度聴いてもよいものであろうが、折角、多彩な先生方が来られているので残念である。また、課外実習は沢山の博物館を観覧できたが、現地では自由行動でさらに自由解散というのは少しさびしかった。時間が限定されないという点ではよいのだが、それなら友人と趣味でくると変わらないし、折角来たので解説や説明など見所を示すものがほしかった。それには、もっとあらかじめの課題をいただくか実習生を一度何組かに分けて回

らせ、誰かが説明する等である。もちろん先生がついて下されば一番ためになると思ったが、事前に調べた学生でもよいと思う。実際、最初に学芸員の話聞いてから見て回ると回らないのでは、意識がかなり違った。願わくは、授業、課外実習は出来るだけ小グループで受講したかった。そうすると、質問もしやすくなるしもっと意味のあるものになったと思う。ただ、多くの学生に対してそこまで手厚く実習させるのも難しいと思う。

#### ・実習展

早目から通達があったにもかかわらず、十月半ばまでは具体的な進め方を検討することはなかった。それは、ほとんど実習展までの具体的なプロセスが見えなかったからである。ここまで学生の自由に任されているのには驚いたが、失敗という意味で非常に勉強になったといえる。反省点は、こだわりである。展示物に関しても展示構成に関してももっとこだわられる部分がまだまだあったのではないかと思う。もし、もっとこだわられていれば、展示ブースをもっと増やして欲しいし、展示期間も一週間では短すぎる。時期も直前の関大祭を利用すれば、学外の人でももっと入りやすくなったのではないかと思う。

#### 3、博物館の意味

博物館実習を通して、博物館や学芸員に対する見方がかなり変わった。極端に言うと博物館は決まったものをただ並べていると思っていたし、学芸員は来館者を監視するために存在すると思っていた。しかし、その裏に、努力や継続が毎日なされていることがわかった。そして、自分なりにやはり博物館は社会に必要であると思った。それは、博物館は文化をまもり継ぐひとつの媒体であるからだ。自分が何者であるか、自分以外の人がどんなことを考え、何を思って生活しているのか、してきたのか。モノから、体験から何かのメッセージを受け取ることの出来る大切な空間である。この空間をもっと有意義にそして楽しんで利用できる人が増えると社会全体も文化面で向上できるのではないだろうかと思う。

何故、学芸員資格を取得したいと思ったのか。それは、ただ「美しいものが好き」であるという想いにほかならない。美しいものを目の前にした時に、万が一でも自分がそれを扱うことのできる、そのきっかけだけでも知っておきたい。国文科は、古典籍や絵巻物、経本などの美術品を取り扱うことが多い。そんな時に物怖じしないようになりたい。そう思ったことが始まりであった。

元々、美術館や博物館、ギャラリーなどへは、時間の許す限り足を運んでいた。本物の美しいものに触れたいがためである。常に本物に触れていることで、紛らわしいものは見分けがつくようになると、外国の鑑定士養成学校の話で聞いたことがあった。自分の中に本物の蓄積が欲しい。そんな想いは今も変わらない。だが、「博物館学」という学問を学び始めてからは、また純粹に「モノ」を見に行くだけではなく、提示をする側の様々な思惑や周辺部などが気になるようになった。美しいものを美しく見ってもらうために、それぞれの館ではどのような工夫がなされているのか。展示台の角度やケース内の照明の明るさや色、キャプションの大きさまで、見てしまうようになった。

2部学生にとって、博物館実習の授業のカリキュラムをこなすことはたいへん困難である。平日は仕事がある。非常勤職員なので有給休暇はない。かと言って人数の少ない職場だけに、休みを取ることもままならない。「2部」という制度もなくなってしまった現在では、何を言っても始まらないものだが、様々に口惜しい思いをしたことも事実である。

自分の中で、最も心残りになったのは博物館実習展である。会期は平日の四日間で、しかも16時閉館。休日の作業には無理をしてでも参加したのだが、直前の準備作業になると殆ど手伝うことがかなわなかった。漸く職場から休みをもらって展示当番に立ってみて、初めて他班の展示も含めて我が「伊勢型紙班」の展示をゆっくり見ることができたという有様である。勤めを持っているという時間的制約から、他のメンバーが気遣ってくれて「会計」という役割を与えてくれた。勿論会計も大切な役割ではある。だが、実習展である以上は、もっと展示作業というものに関わってみたかった。

そんな思いを込めて、いま一度「展示」というものをまとめてみたい。

展示には大きく分けて3種類がある。「鑑賞型と解説型」「屋内型と野外型」「常設展・企画展・特別展」である。絵画など題を勝手に変えてはいけないそのままを見るものとしての鑑賞型と、例えば石包丁を石製穂摘具など、理解しやすいように名まえさえ変えてもいい解説型。古文書など傷んではいけない資料の屋内型と彫刻などの資料の種類によっては屋外展示も可能な野外型などである。

「展示は最大の収納である」藤原先生がよく口になさったことばだ。ディスプレイ（陳列・羅列）ではなくエキシビション、一定の意図を基に並べたものが“展示”である。

展示シナリオを組み立てるのに最も大切なことは「何をどのように伝えるか」であろう。テーマ（課題）には2種類ある。モノの解説と事象の解説、これらをどのように取り合わ

せるかで主題が決まる。展示には二面性があることも忘れてはならない。Presentation (提示)と Interpretation (説示)、そして美術館のような鑑賞展示と歴史資料館のような教育展示である。誰に伝えるのか(対象者は誰か)・何でもって伝えるのか(メディアの選択)それらを考え合わせることによってシナリオはできあがってゆく。未だ馴染みの浅いことば、インタープリテーションについては、この実習の最終講で山口先生が少し取り上げてくださったが、HP や解説書ではなかなかその実態が掴み難い。やはりこれは場数を踏んでこそ身につくものなのかもしれない。身近に開かれる講座には是非一度参加してみたいと考えている。この応用範囲は何も学芸員のみに留まらないであろう。

(見学実習で訪ねた大阪市立科学館のプラネタリウム解説の石坂千春氏のトークが、強烈な印象を残しています。見事にツカミどころを押さえた語りで、これほど鮮明に記憶された解説は初めてでした。リニューアルオープンが今から非常に楽しみです。山口先生がよくおっしゃっていた“ツカミ”はどうすれば学べるのでしょうか)

日本ではメディア(媒体)の選択が大きな問題である。よいメディアとは、観覧者が理解の前に関心を持てるものであり、見るだけのものより、やはり実物や参加型のものであろう。何でもかんでもわかってもらおうとする姿勢ではいけないものであるし、展示そのものから意識を逸らしてしまうようなメディアでは意味がない。

だが、メディアは導入にも維持管理にも多額の費用がかかるものである。行政のことばに“ハコモノ”というものがあるが、ハード面をいくら充実させたところで、人気のない博物館は山ほど存在する。吸引力のある博物館には、どのような特徴がみられるのだろう。

吸引力には、もちろんソフト面の要因とハード面の要因が重なるものである。

「モノの力」収集品(レプリカ・無形のモノも含めて)を軸に展示・普及・研究・保存等の諸活動を展開し、その館のテーマが広く認知されることで吸引力は高まる。

「チェの力」テーマに基づいた調査活動(フィールドワークを中心に研究成果をあげる)や教育普及活動(生涯教育のレベルで社会的要請に応える)を活発にする。教育普及プログラムの品揃えは、例えば展示に関わる音楽会や美術製作講座、バックヤード見学など枚挙に暇がないほど豊富になってきた。

「ヒトの力」運営側の管理組織とサービス活動である。組織にせよ活動にせよ、すべては人材次第(利用者のすべてに対してサービス精神に富むスタッフの存在)が原動力となる。

これらがソフト面の要因とするならば、ハード面の要因とは

「トコロの力」まさに立地条件そのものである。交通や関連性(類似施設や関連プロジェクトの存在)、環境等の条件により、市街地型・郊外型・別天地型などに分けられる。それぞれどの場合も周辺環境との調和が望ましい。

「アシの力」来館者の館内での動線と、来館までの交通手段である。観覧しつつ動き回る

ことが前提とされている博物館では、展示空間と動線の対応が不可欠な問題である。動線には機能性・快適性・明快性が求められる。出前ものとしての移動ミュージアムも発生してきた。

「タテモノの力」バブル時に多く見られた〔設計者の遊び以外の何物でもない〕〔外観は奇抜だが中身は使いづらい〕〔使い勝手はまあまあ不便はないが、空間の豊かさや展示のイメージを喚起する力を欠いている〕などの批判が多く見受けられる（大阪にも多数・・・）。建築的な魅力は必要なものではあるが、それだけでは吸引力にはなりにくくなってきた。建物の外観や空間ばかりではなく、その館に固有の建築技術も見出されるべきである。

以上、これらの6つの力が吸引力を高めるべき要素要因とされる。因みに参考とした『ミュージアム図鑑』ではこの6つの力を基にエクセレントミュージアムを分類している。近畿では、京都国立博物館・京都市美術館・東映太秦映画村・神戸市立王子動物園・神戸市立須磨海浜水族園などが、全国70館あまりの中で登場している。

展示を成功させるための一般的な基準はあるものだろうか。これは『博物館をみせる』に詳しい（「展示」という一点からに視点を絞っていることでとても参考になりました。目次を拾ってみるだけでも興味深い項目が並んでいます）。

①主題が生き生きと提示されている ②要点がすぐに理解できる ③すべての年齢層の利用者に受け入れられる要素を持つ ④記憶に残る ⑤どこからはじめるか、どう続けるかという指示を、利用者に明確に与える ⑥利用者の学びを助ける新しい提示技術を用いている ⑦身近なモノや経験を用いて要点を伝える ⑧資料や標本を総合的に展示するこれらが共通する一般的な成功基準とされるものである。

キャプションひとつにしても、実習展ではたいへんだったと後から耳にした。普段は何気なく眺めている展示解説やラベルも、実際に作ってみる側に立つと「これは解説をつけるべきか否か」に始まり、ことばの吟味、読みやすさのためのデザイン・文字の大きさ・書体から間隔まで、すべてを考慮しなければならない。何処に配置するかも問題となる。見学実習で訪ねた大阪市立自然史博物館では、手書きのキャプションも多く残っていた。だが、それは決して見苦しいものではなく、その内容の豊かさは、作成した学芸員の温もりさえ伝えているものであった。読みやすさを求めて、つい印刷に頼ろうとしてしまう我々の姿勢への警鐘となった。映画の字幕やテレビのプロットには、また多くの別の制限が含まれるが、読み込んで理解するものではなく、パッと見てわかってもらえるものでなければならないという方向性が一致している。

様々な資料をどうすれば最適な状態で見てもらえることができるのか。これが展示の一番しんどい部分でもあり、醍醐味でもあろう。

今回の実習展に関しても、着物から実際の型紙、江戸時代の版本、利用例としてのしおりやコースターまで、様々な展示資料が集められた。展示ケースは4本。向かい合わせのガラスケースの中に、それぞれをどのように配置するか。実作業には殆ど関われなかった

だけにどのように完成したのかは、恥ずかしながら皆目見当さえつかない状態であった。資料の順番、大きさの違う資料の展示の方法、我田引水と言われてもいい。美しかったと思う。だからこそ何故そう思ったのかを考えなければならない。

あまり一般的には知られていないけれども、古くから身近にあったはずのひとつの技術が今失われようとしている。それを多くの人に伝えたい。そんな思いで扱うことになった伊勢型紙。伊勢白子でのフィールドワークで、実際に型紙そのものを目にして、ただ驚いてしまった。こんなに凄いものがある。この驚きを伊勢型紙を見たこともない人たちへ、どう伝えればいいのか。それが出発点であった。三重県立美術館から図録を取り寄せ、三重県教育委員会から資料を借用し、自分の中での「伊勢型紙」は形作られていった。それを人へ伝えるためにはどうすればいいのか。この実作業部分に関わることができなかったことが残念でならない。多くの紆余曲折があったことは間違いない。その変えていった段階のひとつひとつを、是非見てみたかった。その記録を残しておいてもらうことを依頼するのを忘れていた。この部分をこう変えたことによる効果が、はっきりとわかったことと思う。

資料借用をしたお蔭で、借用書の書き方や依頼の方法、返却時の御礼や実習展終了後の図録や写真の送付など、一番簡単ではあるが資料の貸し借りの基本手順は実践することができた。補助金も満額が返ってきたので、メンバー全員に返金することができた。それぞれのかたちでの「実習展」。自分にできる限りのことはやれたので、その部分では納得のいくものであった。

#### 【参考資料】

森岡秀人「博物館学（一）」平成14年度講義ノート及び配布資料

藤原学「博物館学（二）」平成13年度講義ノート及び配布資料

千地万造『博物館の楽しみ方』（講談社現代新書 講談社 平成6年6月 第一刷）

諸岡博熊『みんなの博物館 マネジメント・ミュージアムの時代』（日本地域社会研究所 コミュニティ・ブックス 平成15年7月 第一刷）

小原巖編『博物館展示・教育論 博物館学シリーズ3』（樹村房 平成12年9月 初版）

K・マックリー（訳：井島真知・芦谷美奈子）『博物館をみせる 人々のための展示プランニング』（玉川大学出版部 平成15年5月 第一刷）

『ミュージアム図鑑 博物館・美術館・資料館の魅力と吸引力』（彰国社 平成9年7月 第一版）

個人的所感・・・

博物館実習はしんどいとは聞いていましたが、それ以上に受講を楽しみにしていた科目でもありました。一年を通じて、いえ学芸員資格取得の科目関係になりますとほぼ4年間を通じて、博物館学と関わってまいりました。

実習となりますと、もっと専門的なことになるのかと思っていましたけれども、実際学生側の専攻もばらばらでしたので、そこまでの個別対応はやはり無理だと思いました。例えば、国文の学生ですともっと美術品を扱って欲しかったですし、歴史の方でしたら考古の割合を増やして欲しかったでしょうし、それは仕方のないことと思います。

見学実習、という名まえのとおりで、博物館のバックヤードを見せて戴く機会には殆ど恵まれなかったことも、残念なことのひとつです。これだけ大勢の学生では、やはりそれも無理なことでしょう。

レプリカの作成現場の見学は、休日でしたら是非参加したかったです。東京での見学実習にしても、曜日の設定は木・金・土。最終日に朝6時の新幹線に乗って、追いつくのがやっとの状態でした。でも今年度は表装のお仕事場を見学できたことが、とても嬉しかったです。身近に直接触れることなど、ほんとうに貴重な機会だったと思います。

実習展の講評も、すべて平日のために全く聞くことができず、これも残念なもののひとつです。実習展に関しましては、これまでも平日開催のため、一度も見る事ができませんでした。せめて土曜日の午前中まででも開催して戴けたなら、と願っておりましたが、これも2部という制度がなくなってしまった以上、もう必要のないお願いとなりました。

東京実習での宿泊は、東京国際ユースホテルを選びました。会員外でも同一料金(素泊まり3800円)であり、飯田橋駅直結という地の利もありました。4人部屋であることを考慮しても、門限は22時まででもあり、ほんとうに便利に使うことができました。同じ班の皆は東急インのツインを利用したそうで、ツインならば朝食付でユースよりもコストパフォーマンスが高いとのことでした。

昨年一年、いろいろな美術館や博物館を回りました。別添のファイルには加えていないものも数多くあります。ただ、今回はそれぞれの館に対してのコメントを残すことができなかったのも、これは今後の課題としたいと思っております。

これからも、様々な視点を持って、美術館や博物館へ出かけてみようと思っております。今後ともご教示を何卒よろしくお願い申し上げます。

ほんとうに ありがとうございます。

<実習・講義について>

1年間、関西大学の博物館実習で受けた授業は、これまで大学で受けた授業とは異なるものでした。講義では、毎回、各分野の専門の先生がプリントやスライドを用いた、興味深いお話を聞くことができました。概説的な基本事項の説明から、博物館の現状や問題点まで、多岐にわたる講義を受けられたことは、大変有意義だったと思います。授業の内容に喚起され、茶道具の専門店を覗いてみたり、スライドで知り、興味を持った「民家集落博物館」を個人的に訪れたりもしました。また、印刷に関する講義は、私自身のアルバイト（問題集の印刷・製本）と関連していることもあり、興味深かったです。先生方の印象も、これまで、大学の大学で受けてきた教授とは違う印象を受けました。無機質な印象を受けることが多かった他の授業とは異なり、博物館実習の授業では先生方の「生の声」を聞き、感銘を受けたり考えさせられたりすることが多数ありました。特に、いろいろな先生方の学芸員を志すきっかけや学芸員になるまでの道程に関するお話は印象的です。また、博物館の現状・問題点について語られる時の先生方からは、博物館や資料への愛着を感じました。

博物館での実習では、実際に自分の手で触れ、行動をすることで、快い緊張感をもって授業に臨むことができました。資料の梱包や掛け軸の取り扱い、茶室での作法など、それぞれ行ったことは違いますが、いずれの先生からも「装身具ははずす」「手を洗う」「資料はできる限り床（机）から離さない」といった、資料を傷つけないようにする様々な配慮を学びました。そこから得たのは、学芸員としての基本的かつ根本的な「モノ」に対する姿勢、謙虚さです。そうした精神は、たとえ生涯学芸員として働く機会がなかったとしても、日常生活で、職場で応用することのできるものだと思います。実際、この一年間で私の「モノ」に対する考え方や接し方は変わりました。「モノ」に対する気遣いは、「ヒト」と接する際にも現れるものだと思います。そうした意味でも、実際に資料に触れて授業を受けられたことは、私にとって大変意義あることでした。これからも、授業で学んだことを実生活にも活用・応用していきたいと思っています。

<課外実習・東京実習について>

この一年間を通じ、様々な博物館を訪れ、見学をしました。それに伴って様々な地を訪れることもできました。私は高校生の頃から、暇を見つけては博物館・美術館見学をして

いたので、今年度訪れた博物館の中には、二度目、三度目になる館も多かったです。地元の京都にある国立博物館や近代美術館、文化博物館は何度となく訪れたことがありました。大阪府立近つ飛鳥博物館には、以前安藤忠雄氏の建築を見たいという目的もあって訪れました。他にも、見学したことのある博物館はありましたが、これまで個人的に訪れた時と、今年度、授業の一貫として訪れた時では、印象や得るものがかなり違ったように思います。以前は館内の資料や美術品しか見ていませんでしたが、「博物館実習」の授業を受ける中、授業として訪れた際には、資料だけでなく館全体の雰囲気や設備、学芸員の方たちの様子に注目するようになりました。授業で学んだ展示の方法・構成・内容、あるいは照明等の配置を実際の博物館で注意して見てみると、ただ見学していた頃とは違う、新たな博物館に出会うことができました。

また、数館の博物館で、現場で働く学芸員の方のお話を聞いたことは大変有意義だったと思います。館の設計上の問題や運営上の問題についてのお話には、「大きな施設・組織を運営していくことの困難さ」を感じました。

東京実習は、個人的にはなかなか訪れることができない地に行くことができ、よかったです。雑然とした印象のある東京ですが、交通の便の良さには感銘を受けました。いずれの博物館を訪れるにしても、そのほとんどが最寄に駅があり、また、運賃も関西に比べ安価でした。博物館だけの問題ではありませんが、公共の乗り物を用いてどこへでも、しかも安価で行けるということは重要だと実感しました。

「東京国立博物館」の規模の大きさ・「江戸東京博物館」の最新の設備も印象的でしたが、3日間の東京実習の中で、最も心に残ったのは、グループ見学で訪れた「日生劇場」でした。「日生劇場」は、実習展での私たちの班のテーマである村野藤吾氏設計による建築です。東京実習の際にも、実習展で生かすことのできるグループ見学をしようということで、前日のよみうりホール（村野藤吾氏設計）に引き続き、訪れたのでした。予約を入れていたので、休館日にもかかわらず、職員の方に劇場の内部を案内していただくことができました。見学ツアーでは、職員の方の解説のもと、ホールの中はもちろん、舞台裏まで見せていただきました。海中をイメージしたホール内の美しさ・設計の決めこまやかさは圧巻で、感嘆の声しか漏れませんでした。特に、天井の壮大さと間接照明の美しさ・階段や二階席の曲線がすばらしかったです。許可をいただいて様々な角度から天井や階段を拝見し、写真を撮影しました。

劇場そのものの美しさもさることながら、私が最も感銘を受けたのは、職員の方のお話でした。建築としての美を重視したホールは、実用の面から見ると大変勝手が悪く、照明一つを交換するにも専門の業者を呼ばなければいけないそうです。また、バリアフリーという観念のなかった頃に建てられたため階段が多く、車イスの方が来場された際には職員が数名で持ち上げて運ぶということでした。さらに、曲線の多い設計のため大変埃のたまりやすいホールを、職員全員で毎日掃除されるという話を聞き、改めて「デザイン重視の建築物の難しさ」を感じました。しかし、私が感銘を受けたのは、案内していただいた方

の「不便でも、手間がかかっても、この劇場を愛しているのですから苦にはなりません」という言葉でした。他の職員の方もみなさんそう思われているらしく、中には職務終了後もホール内で天井を眺めて時を過ごす方もいらっしゃるとのことでした。

こうしたお話を聞き、モノに対する愛着の深さと、それに関わり働くことの楽しさ・充実を教えられたように思いました。私にはまだ、そこまで「モノ」や「場」に愛着を持ったことがないので、いずれ、そのようなモノや場ができた時には、日生劇場の方のお話を思い出すのではないかと思います。

### <実習展について>

授業で学んだことを活用・応用しての実習展の作業は、はじめ手探りで恐る恐るだったものの、いつしか楽しくなり、最後の講評を迎えた時は達成感と安堵を覚えました。

私は展示班として実習展に携りました。最初にリーダーを定めなかったためか、展示の肝となる写真を撮影し、プリントアウトをする役目を担っていた私が、自然と皆への連絡や役割分担をする係りとなりました。そうして作業を進める中、うまくいったこともあれば、反省点もたくさんありました。反省点としては意見を出してもそれを総合し、実践していく過程で迷いや不都合が生じ、作業が円滑に進まなかったこと、分担すべき作業を「自分でしたほうが手っ取り早い」と抱えてしまったこと、あるいは作業の伝達がスムーズかつ正確に行えなかったことなどが挙げられます。結果として、作業が予定より遅くなってしまい、最終日までずれ込んでしまいました。もう少し余裕をもって展示を終え、最終的な確認・文書の校正を行うべきだったと思います。また、他の班（図録・模型構成）との連絡が徹底せず、それぞれに一貫性が欠けていたことも反省展の一つです。

実習展の作業を通じて感じたのは、多人数で作業にあたる際の「コミュニケーション」「意思疎通」の大切さと困難さです。これは、展示を作り上げる時のみならず、どのような場面でも言えることです。

実習展を通してもう一つ、感じ、考えたことは、いかにして展示する側の意思を見学する人々に伝えられるか、という点でした。私たちの班は、「村野藤吾」という建築家をテーマに挙げ、氏が設計した関西大学の校舎を中心に展示をしました。当初から、「建築」という実際に展示をすることができないものをいかにして展示するか、また、私たちの展示の意図である「見過ごされ、壊されつつある関大の村野藤吾建築を見直す」という思いをどのようにして展示として見せるかを考え、悩みました。悩んだ結果、

- ・ 展示は写真を中心とし、その代わりに「関西大学ツアー」として、見学者に実際に関大建築を案内つきで見てもらおうようにする。
- ・ 代表的な建築については模型を作成し、立体的に感じてもらう。

- ・ 多少解説文が長くなるとのリスクを負っても、見どころ・ポイントを文書として提示する。
- ・ 現在と過去の関大建築を対比させて展示する。

といった方法を取ることにしました。不十分ながら、こうした工夫をすることで、少しでも展示に「意味」が生じたように思います。中でも「ツアー」は評判がよく、先生方の講評においても評価していただくことができました。

以降も、様々な局面において、授業や実習展で学び、考えたことを生かしてゆきたいと考えています。

以上

## 博物館実習1ヶ年の総括

03M~2208 村尾 美紀子

現在、大阪市の中学校の現職教員（美術科）である私は、2003年4月から長期自主研修制度を活用して、2年間休職し、大学院（文学研究科哲学専攻）に進んだ。その際、私は自分の研究をさらに進めていくというのと、もう一つの目標を持っていた。それは学部（本学二部文学部昨年度卒）時代に履修していなかった博物館実習を受け、学芸員資格を取得することである。私がこの資格を取ったところで、学芸員になるには、すでに年齢超過であり、資格取得に終わるのだが、今回の長期研修の計画の一つに、博物館（私の場合は教科の性質上、美術館）で展開されている教育プログラムを学校現場にどのように生かせるかというテーマを取り上げた。その意味で博物館実習では、現場で学芸員としてキャリアを相当積んでおられる先生方から各自の専門的な研究や学芸員の日々の実務、今日の博物館が抱える様々な問題など、生の講義や実習における指導をしていただき、有意義な一年間だったといえる。

本レポートでは「関西大学博物館なんでも相談会」、見学実習全般（東京実習含む）及び実習展について、よかったこと、反省すべき点をまとめ、一年間の総括としたい。

### 1. 「関西大学博物館なんでも相談会」について

8月25日、26日の二日間に開かれた「関西大学なんでも相談会」に私は、初日のみ参加させていただいた。これは今年初めての取り組みであったが、ホームページやピラなどの中身から判断すると、小中学生で、夏休みの自由研究の相談、支援活動あるいは、家にある美術骨董品をいわゆる「お宝鑑定」するなどを主旨としたものである。事前に問い合わせのあった2件によって、来訪が予想される参考文献等の準備等をした。そのうち1件は、実際に来られた。しかし予想に基づいて、どのような質問がでるのか、依頼が来るのかを想定し、その対処の方法、また児童であれば、自主的な調べ学習にどのようなアドバイスが適切なのかということ等、イメージするのは、大変勉強になると思った。当日、女性が家伝来の書額を持ち込んだ事例で、剥落した文書を解説された院生さんを見て、学部時代にしっかりとした専門性を身につけられているのに感心した。私自身は実際自分の力で何かできたということには至らなかったが、様々な専門分野を持った人たちとプロジェクトを組むということは、刺激になりお互いに大変プラスになるのではないかと思う。また「お宝鑑定」に来られる人の思いを少し理解できたような気がする。先日某市の博物館のギャラリー解説に出かけたが、地元の焼き物に関する特集展示だったので、鑑賞者（聴

衆)の関心も高かった。解説後は鑑賞者が展示品に関わる家のお宝の年代査定など、実際のモノを持ち込んだ相談を即座に依頼され、まさしく「なんでも相談会」ならではの光景を見ることとなった。学芸員の仕事は、「モノ」を見る目と適切な資料の読みとりや判断が常に要請され、「モノ」や知識を通じて市民にサービスを提供できるのだと感じた。

## 2. 見学実習全般を通して

実習では、大阪および近郊の見学実習を6日間12カ所、また東京実習も前後一日ずつ追加して、5日間13カ所回ることが出来た。元来、博物館にはよく足を運ぶ方であったし、休職中で研究に専念できるこの時期を生かそうと、2003年は博物館、美術館を100カ所巡るつもりでいた(実際は88カ所止まりだったのだが)ので、この見学実習は楽しみでもあった。専門は日本近代美術史をフィールドにしているが、古典から現代またジャンルを問わず、幅広く見ることを心がけている。どうしても美術系に偏りがちであるが、見学実習では普段あまり足を運ばない自然系博物館に回ることもできてよかった。東京実習の時期は多くの博物館、美術館が企画展示の端境期で、企画展目当てを主に考えることはできなかったが、東博などのように圧倒的に量と質の高い常設展示は別として、自主見学のコースに取り入れた小さな博物館は、鑑賞者と資料が近い関係で楽しめた。台東区下町風俗資料館は、私の世代では、原体験のどこかに懐かしさを感じる「モノ」があふれていた。大衆の生活文化を具体的に「モノ」としてみることができるとこのような博物館は、歴史化された明治～昭和をとらえることが出来る。また印刷博物館では、古典的な印刷技術から、現在に至るまで、実物資料やコンピュータによる画像資料で見ることができ、また鑑賞の最後にCGで自分だけのポストカードができて、時間が経つのも忘れていた。予約制ではあるが本格的に印刷の植字体験をするコーナーなどユニークな企画も見られた。前者が公立、後者が企業の博物館であったが、地域密着と企業の社会的な役割としての文化貢献が感じられ、鑑賞者の興味関心にこたえる切り口が成されていたと思う。

近郊の見学実習では2カ所が印象に残っている。それは7月末にまわった元興寺文化財研究所(生駒)、京都科学である。普段何気なく見ている文化財は、保存処理や修復といった我々には見えない営みの中で成り立っている。また展示品に有効な資料としてのレプリカも、博物館にとっては欠くことができない。京都科学ではほんとうに驚くべき精巧なレプリカをみて感心した。そこでは、またこんなおもしろいエピソードを耳にした。京都科

学には奈良、薬師寺の観音菩薩立像のレプリカがあるのだが、2003年4月に開かれた奈良国立博物館での「女性と仏教 いのりとほほえみ」展に、薬師寺の観音像（オリジナル）が出品されている間、薬師寺ではこちらのレプリカが安置されていたそうである。「仏像」を「美術作品」としてながめるといふ視線が成立した明治以来、信仰の対象／美術品、オリジナル／レプリカといった境界を、この話から改めて思い浮かべた。美術系となると、レプリカにはどこか抵抗感を感じてしまうのだが、その時点で「われわれがみている美術作品とはなにか」を突きつけられるようである。そしてここで見せられたレプリカ制作の熱い思いは、IT化社会においても、プロフェッショナルな職人集団の手仕事すなわち人間の技と知によって成されるということを実感し、安心もした。これは先に見学した元興寺文化財研究所でも同様である。

### 3. 実習展（伊勢型紙班）の取り組みを通して

博物館実習の最大の課題は、言うまでもなく実習展である。私たちの班は、前期の間にテーマ決定やコンセプトの確認にむけて、何度も打ち合わせを持った。最終的に「伊勢型紙」に決め、最終的に22名でプロジェクトを組むことになった。8月には、伊勢白子、寺家地区の第一回フィールド・ワークを行い、幸い私も参加することが出来た。「伊勢型紙」の存在も知らなかった私ではあるが、伝統産業館では、今も匠の技を伝える職人さんの話や、寺家の資料館では、その発祥をめぐる話（言い伝えの域を越えないにしても、かなりの実証性のある内容）、江戸時代の販路拡大の歴史的流れなど、ボランティアの元小学校の校長先生からお聞きして、大変参考になった。また貴重な型紙を見る機会や、往時のたたずまいを見せる町並みなど、フィールド・ワークならではの学びを得た。

実際の活動としては、私は4人の図録班メンバーに入ったが、私以外のメンバーは史学の方が、社会人や後期課程に進まれている二人、国文の前期課程の方など、すでに研究アプローチや方法論も豊かな経験をお持ちの方達で、やっつけて本当に楽しかったし、勉強になった。私自身もこの無名の型彫り職人が引き継いできた技、そしてまた無名の絵師によって生み出されたその図案の美しさとユニークさを兼ねた粋の美が、今日に至るまでそのデザインのレベルの高さを超すことができないという世界にふれることができた。そしてそれを現代に引き継いできたのが、他ならぬ生涯一つの技で、伊勢型紙をつくっている型彫り職人であることを。美術におけるヒエラルヒーの問題や、在銘／無銘を分けること

によって成り立ってきた「美術史」とはなにかを改めて感じることのできる魅力的なテーマとなった。

最終日の展示当番の折り、西川先生から貴重なご意見をいただきました。概ね高く評価して頂いたが、プロの眼の先生からは、展示ケースのグルーピングの性格を示す、中パネルや個々の資料のクレジットなど、それぞれの大きさの統一などを心がけるよう指摘された。また展覧会カタログという特殊な書物においては、展示期間や主催、場所をあらわした一文をどこかに入れるという作法、また奥書（著作権の抛り所）の欠落、あいさつと目次の関係など具体的に指摘された。大変勉強になったと同時に常日頃、美術館に行っては多くの図録を買っている者として、見ているようで見ていない自分を恥じた。

展示当番の間に他の班を見学することも出来た。お隣の「村野藤吾」班は、外部発注の図録を準備し、希望者に抽選で配布するというアイデアを出していた。そのおかげで私はいただくことになったが、「アソビゴコロ」のキャッチ・フレーズそのまま、実習展が終わってからも、夢を届けてくれたような気がする。

以上が「博物館実習の1ヶ年の総括」であるが、このような学びは、学芸員の仕事に携わることの有無を別に、非常に貴重なものだといえる。「実習展」や「なんでも相談会」のプロジェクトは、小さくても学際化の具体的な方法を体験できた。社会に出ると同じ専門分野で成り立っている組織はまず、ないといってよい。私が20年間過ごした学校現場もまた、もちろんそうである。だから創造的なことも可能である。いったん外に立って、自分の所属していた現場を見ることの大切さ。その言葉は、この講義の初日、ご自身の立場に立って話された井溪先生から聴かされた。「博物館実習」の1年を、私にとって人生の貴重な2年間にとることが出来て、本当によかったと思う。